

ナイチンゲールから影響を受けた4人の日本人

— その2 女子教育のパイオニア 津田梅子と安井てつ —

広島文化学園大学看護学部

佐々木 秀 美

■ はじめに

わが国における看護教育の胎動は明治期初期に起きており、『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影—』¹⁾ や『ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり—教育の創造と伝承—』²⁾ でも報告したとおりである。

わが国はナイチンゲールから多くの遺産を受け継いだ。それは単にナイチンゲール方式を導入して看護教育を開始したにとどまらない。杉田暉道他著の『看護史』³⁾ にはナイチンゲールに面会できた人物として石黒忠恵(ただのり)⁴⁾・佐伯理一郎⁵⁾・津田梅子⁶⁾・安井てつ⁷⁾の4名の名前が記述されている。既に『ナイチンゲールと面会できた4人の日本人—その1 石黒忠恵と佐伯理一郎—』⁸⁾ でも報告したように、石黒忠恵は、明治維新という騒乱期にあって、日本の医学の向上と軍医制度の改革と同時に日本赤十字社社長として陸軍に女性による看護を導入した。佐伯理一郎は医師として自身の病院の運営・管理をしつつ、京都看病婦学校の運営・管理にも参画し、フローレンス・ナイチンゲール⁹⁾の管理能力と科学的な看護について強い関心を抱き、彼女のキリスト教的愛の精神を看護教育に活かそうとした。両名は、我が国の医学が発展途上の中で、日本の医学の向上に努めつつ、看護教育を必要不可欠なものとして考え、発展に尽力した。彼らはそれぞれの生涯では直接的・間接的にナイチンゲールから影響を受け、己が感じる意のままに、自己の理想を貫きとおした人物たちであった。

他方、津田梅子・安井てつの両名は、わが国、

女子教育のパイオニアとしてその発展に貢献した人物として有名である。“学制”における教育方針は男女共学が大前提であり、女子教育も変革される予定であった。しかし、1879年(明治12年)の教育令発布以降、教育方針が大きく変化し、男女別教育が推進された。江戸時代からの儒教主義思想が台頭する中で、西欧諸国で開始されたナイチンゲール方式による看護教育も1885年(明治18年)には導入された。しかし、その教育は、国民の教育の機会均等に立脚した教育政策ではなく、病院付属の看護婦養成所であった。

そもそも、看護教育はナイチンゲールによって創造的に開始されたものである。しかし、ナイチンゲールは「明確な目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかなければならない。」¹⁰⁾と述べ、目的が明確であるならば、その目的実現のための方策は絶えず発見しなければならないと述べた。

拙稿である『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影—』でも報告したように、わが国の看護教育は、明治維新以降の我が国の諸外国との外交・政策的な影響と独特の文化的・思想的背景の影響下で推進された。諸外国との往来の中で、ナイチンゲールは、我が国に熱狂的に受け入れられ、『国定教科書におけるナイチンゲールの取り扱いに関する若干の考察』¹¹⁾でも報告したように、子どもたちの道徳教育に大きく影響を与えた修身教科書にも登場するようになり、理想的人物像として子どもたちの心に沁みこんだ。

ナイチンゲールに面会したとされる津田梅子・

安井てつの両名も、わが国の教育的施策の中で、それぞれ、女子教育に貢献した人物であり、明治・大正・昭和という激動の時代にあって、その時代を創り上げてきたという点では、ナイチンゲールが述べた明確な目的実現のための方策を考え出した人物たちであろう。そこで、本論ではまず、明治維新以降の女子教育について概観しつつ、津田梅子・安井てつの生涯と、その生涯の中で、ナイチンゲールに影響を受けたと考えられることについて検討を加える。

■ 日本の女子教育政策

維新後の1871年（明治4年）、将来の日本の行く末を担う人物の育成には、母親になるべき子女の育成が重要であると考えた北海道開拓長官黒田清隆¹²⁾は、「それ開拓の要は、山川の形勢を察し、往来を通じ、土地の美悪を検し、培養を盛んにし、似て生を厚くし、俗を美するにあり、これをなすは人材に困る。人材を生ずるは師弟を教育するにあり、今や、欧米諸国は、能く子弟を教育するものと請ふ可しゆえに今、幼稚の女子を撰み、欧米の間に留学せしめん事を欲す。」¹³⁾という進言書を政府に提出した。子を育てるのは母であり、母の教育がなければ優秀な子は育たない。それ故に、将来、母になるべき女子たちに先進国であるアメリカの教育を受けさせるべきであるというのが黒田の進言であり、その進言によって実行されたのが幼き子女のアメリカ留学である。選ばれた5人の少女¹⁴⁾達は、岩倉使節団¹⁵⁾と共にアメリカに向かった。この中に梅子もいた。

次に、新政府は1872年（明治5年）、国民の教育の機会均等に立脚する“学制”¹⁶⁾を發布した。“学制”における教育方針は男女共学が大前提であったために、女子教育は“学制”發布後、大きく変化した。しかし、その教育政策は文明開化をもたらすものではあったが、江戸時代も含め、長い間人々の間にしみ込んだ文化や思想が簡単に覆せるものではなかった。江戸時代には寺子屋という教育所があったが、それも極わずかな人々がその恩恵に浸っていた。わが国の教育顧問としてアメリカから招かれたデイビット・モルレー¹⁷⁾は、子供の教育をするのは母親であるから、女子も男子と同等に教育する必要があると考えていた。

モルレーは女性には情愛があって忍耐力を持っている。その他、児童の心情を察し子供の取り扱い

方を心得ており、教師として適性がある。ゆえに、「女子は児童教師として最良である」¹⁸⁾と述べ、女性が教師としての好条件を持っていると述べた。モルレーの進言によって1874年（明治7年）、田中不二麻呂¹⁹⁾文部大臣は「人民ヲシテ暫時漸次開明ノ域ニ臻（イタ）ラシメント欲スル、女子師範学校ヲ設クルヲ以テ大要務トス。蓋シ女子ノ性質婉（エン）静萱（ギ）ニ能（ヨ）ク其ノ教科ヲ請ズルヲ得ルノミナラズ向來幼穉（チ）ヲ撫養スルノ任アレバナリ」²⁰⁾という建白書を太政官に提出した。提出された建白書によれば、国民を啓蒙するためには、女子の特性を生かした教育者教育としての女子師範学校を設立する必要があるとのことである。彼等の要望によって1875年（明治8年）東京女子師範学校が設立された。

この教育は、男子の高等師範学校の教育内容とほぼ同じである。従って、この頃は男子と女子の教育を別に行うという事などは考えていなかった様に思われる。しかし、与える方はともかく受ける側の国民に問題がなかったとは言いきれない。何しろ、女子に教育をうけさせるどころか、男子に教育を受けさせるほどの経済的余裕もなく、その上、女子に知恵をつけて将来、夫となるべき人に楯突くなどということは持ての他であると考えられていたからである。

唐沢富太郎著の『教師の歴史』²¹⁾によれば、当時の師範学校の教科書はほとんどアメリカの小学校で使われていたものを直輸入といった形で採用した。課業に関して看護関係から注目したいのは養生論である。『教員養成』²²⁾には、明治10年代に使われた上等小学教科書として、フィラデルフィヤ医学校の小児科医ゲッセルの著作『子供育草』²³⁾、アメリカのハスケル著作『家政要旨』²⁴⁾、クレンケとハルトマンの育児書『母親の心得』²⁵⁾、マルチンダルの『養生浅説』²⁶⁾等が紹介されている。

『子供育草』は、その緒言に書かれているように小児養育に必要な哺乳、睡眠、浴場の方法から衣食住にいたるまで、懇切丁寧に記述されている。例えば、浴場の方法という項目では不潔が病気をもたらすと述べられ、身体の清潔に対する習慣を子供のころより持たせることが大切であると述べられている。空気については、悪い空気を吸うことは身体にとって悪影響であるとして、室内の換気の仕方を図示しながら説明している。それらは子供の身体を強健にするために必要な事柄で

あると述べられた。

『母親の心得』は、訳者が序文で述べているように、ドイツ人医師クレンケ著作の『ムッテル、アルス、エルチヘリン』と、同じくドイツ人ハルトマン氏の『養生説』を加えた著作である。訳者は、女性は結婚して子供を産んだら、その子供を養い育てることが大きな任務であると述べている。著作の主な内容は知恵の発達と五感、子供の遊ばせ方、言語の教え方など、子供の成長・発達に関することである。続いてその成長・発達段階で引き起こされる子供の病気の対処法について述べている。

『家政要旨』は、訳者の弁によれば将来主婦になるべき女性は、家庭を切り盛りする役割があるから家事管理について学ぶ必要があるとのことだ。その内容は家屋の購入から雇い人の取り扱い方、客のもてなし方、料理・洗濯にいたるまで懇切丁寧である。下巻は妊娠・出産・育児に対することが多い。特に出産に関しては分娩前・中・後の看護の仕方まで記述されている。家庭出産が主流であった頃には、出産の経験者や産婆と呼ばれる職業の者が出産に携わった。この方法だと出産に直接携わる者の他に介助者が必要である。ゆえに、何をすべきか教育する必要があるのだろう。この著作は看護を専門とする女性たちが学ぶにふさわしい内容で構成されている。

『養生浅説』は、空気・水といった項目が入り、人体の発育等医学的なニュアンスの強い内容である。しかも最後に看護法が書かれている。養生学の目的は人身の発育を変動する諸般にあわせ、諸機能を健全に発育させることであるとして、その方法を述べている。

以上から、女子師範学校で教育された養生論は、子供の健全育成に関わる内容で構成され、ある意味で育児書である。しかし、どちらかと言えば、医学・看護学的要素の強い内容である。それは著者のほとんどが医師だったことに由来するのであろう。これらから尋常小学校の教育に当たるべき教師には、発育盛りの子供たちを健全に育成するための方策を学ぶ必要があると考えられ、看護法などの教育を行ったものと考えられる。教師への健康教育は間接的には、将来母親になる女子児童に反映されることを期待したのであろう。しかし、当時の女性達の教育状況からして、女教師がどの程度理解して当時の女児達にどの程度伝達でき、そしてどの程度、理解できたかは疑問が残る。

人々の健康に関する教育に関してナイチンゲールは人一倍関心を持っていた。1860年(万延元年)に出版した『看護覚え書』²⁷⁾の序文に、その本の目的は看護教育のためではなく、イギリスの女性たちに向けて書いたものであると述べ、「学童のうちの少女達、彼女達もやがては母親となり」²⁸⁾と書いている。ナイチンゲールは女教師達に家庭の中の新鮮な空気や清潔といったことなど、少なくとも人々の健康問題に関する教育を行う必要があると述べている。彼女は教育された女教師達が少女達にその教育を施せば、伝染病等も未然に防げると考えた。わが国でもこの頃、家庭看護が主流であったから、看護教育構想ではなく女教師養成への教育内容が配慮されたと考える。

しかし、日本における女教師養成の目的は女性に職業を持たせ、経済的に自立させようとしたのでは無論なく、村上信彦がその著『明治女性史』²⁹⁾で指摘したように、当時の国家の経済力から、男性一人の給料で女性3人が雇えるといった現実的な対応から実施した政策であったのかもしれない。この時期、国家的な政策の中には看護婦教育の動きはないが、個人的な主張としては博愛社病院を設立した橋本綱常³⁰⁾陸軍軍医総監やアメリカ女性宣教師達から、その必要性が僅かに述べられている。梅子は、イギリスの女子教育視察のおり、1899年(明治32年)にはナイチンゲールに面会し、強い感銘を受けた。彼女は日本の女性の位置づけについて次のように記した。

「日本の成長が片方だけに偏っている限り、半分の人が置き去りにされながら、後の半分の人達だけが前に進むことを許されている限り、日本は決して本当に進むことはできません。女性の地位が向上し、教育を受けるまで、日本が真に重要な地位を得ることはできないと思っていました。女性もその権利を認められるべきで、そして社会に貢献する力となるべきです。」³¹⁾その後、梅子は自己の理想実現のために、女子のための教育を開始した。

『Trend in Nursing History』³²⁾を書いたElizabeth M. Jamieson等は、各国における看護の発達で、インド、イラン、朝鮮と共に日本を同じカテゴリーの中に含め「パイオニアとして設立された幾つかの学校も、ヨーロッパの学校に比べると特殊な困難、すなわち、人種的慣習と偏見、宗教上の慣習と拘束、言語の違い、訓練を受けにくる女性の多くに見られる教育水準の低さ」³³⁾が

看護の発達を阻害したと述べている。

■ 津田梅子

1. 津田梅子の生涯

梅子の生涯については吉川利一著『津田梅子』³⁴⁾、古木宣志子著『津田梅子』³⁵⁾、『津田梅子 ひとりの名教師の軌跡』³⁶⁾を参考にした。

梅子は1864年（元治元年）父、津田仙³⁷⁾と母初子の次女として江戸牛込に生まれた。仙は梅子が3歳の時に渡米し、帰国後、新潟奉行の英語教授、通弁に抜擢された。1869年（明治2年）には築地のホテル館に勤務、まもなく理事に就任したほどの人物である。彼は、梅子が7歳になった1871年（明治4年）、ホテル館を辞職して開拓使嘱託として向島の農園で働いていた。同年、開拓使派遣の5人の少女の一人に娘の梅子が選ばれた。1871年（明治4年）、アメリカに渡った梅子は日本弁務官書記チャールズ・ランマン³⁸⁾方に預けられ、1872年（明治5年）にステイーブンソンセミナリー（小学校）に入学した。1873年（明治6年）には自ら願ってキリスト教を受洗した。

アメリカにおける女子の小学校教育は、殖民地時代から実施されており、1790年代の就学率の格差はなかった³⁹⁾。その後、ベンジャミン・フランクリン⁴⁰⁾の学校教育政策によって女子の中等教育が提唱され、独立戦争後は、家庭教育が主流の女子アカデミーが設立し始めた⁴¹⁾。これらアカデミーは19世紀の前半から飛躍的に発展した。そして、アカデミーはセミナリーと改称され、主として教員養成の為の教育課程が編成された⁴²⁾。1826年（文政9年）にはニューヨーク州に女子ハイスクールが設立され、1838年（天保9年）には州立の師範学校も設立された。南北戦争後の1870年代になると、アメリカ全土における女教師の割合は61%に達していた⁴³⁾。梅子らが渡米した頃のアメリカは、女子大学が設立され、女子の高等教育の整備がなされつつあった。1876年（明治9年）に、梅子は山川捨松⁴⁴⁾、永井繁子⁴⁵⁾らとともにアメリカ独立百年記念の博覧会に参加した。1878年（明治11年）、ステイーブンソンセミナリーを卒業、ワシントンのアーチャー・インスティテュートに入学し、1882年（明治15年）に同校を卒業した。1882年（明治15年）に捨松と一緒に帰国した。

帰国後の1883年（明治16年）、梅子は築地に設立されていたメソジスト派が経営する海岸女学校

に臨時の職を得た。この頃、梅子は伊藤博文⁴⁶⁾と再会した。1884年（明治17年）、伊藤は下田歌子⁴⁷⁾が経営する桃妖（とうよう）桃天女塾で、梅子が教えられるよう手配した。同時に、梅子を自宅に住ませ、夫人と娘の英語の家庭教師をさせた。共にアメリカに渡った捨松は、陸軍大臣大山巖⁴⁸⁾と結婚した。捨松の結婚も教育者として自己の資質のなさにきづき悩みぬいた結果の決断であった。時代の中で自分の行くべき道をみつけた捨松に引き換え、梅子はまだ自分が何をなすべきかについて迷っていた。梅子はせっかくアメリカに渡ったのに自分の役割が何もない現実に直面していたのである。しかしながら、他方において梅子は「私はしごとができることでもっと幸せです。」⁴⁹⁾とも述べている。そして捨松は、アメリカの友人アリス・ベーコン⁵⁰⁾に宛てた手紙に、梅子がかawaiiそうと書いている。同年、梅子は捨松を含めた婦人慈善会が中心となって企画された“レディス・フェア”という鹿鳴館でのバザーにも協力した。婦人慈善会は既に“看護婦教育所設立の主旨”を高木兼寛⁵¹⁾に手渡していたが、このバザーでの収益金によって、1885年（明治18年）に有志共立東京病院看護婦教育所が設置された。この看護婦教育所が我が国で初の看護養成機関である。

梅子は、1885年（明治18年）には華族女学校（現在の学習院）で教授補として教えるようになった。これは伊藤の手配によるものであった。1886年（明治19年）には、華族女学校教授職に昇格した。しかし、梅子の“自分が何を成すべきか”の疑問は更に深まっていた。華族女学校は、日本で社会的地位のある女性達に教育を施そうとの目的で設立された。しかし、その教育は、しとやかで美しく、人形のように可愛い、知的には生ぬるい⁵²⁾学生たちが対象であり、自身が求めている教育ではなかった。この教育に不満を感じた梅子は、何か研究をしてみたいと考えるようになった。1889年（明治22年）、梅子は、華族女学校に籍をおいたまま、プリンマー・カレッジで生物学を修めるために渡米した。この大学はキューカー派が経営しており、モリス・メアリ⁵³⁾の尽力で学費や寮費の免除という特典が与えられた。

日本を離れてみると一層日本の女性の事が気かりになっていた。「維新後20余年になるが、日本はまだまだ古い習慣に囚われて、女子に教育の機会を与えぬ。」⁵⁴⁾と日本の古い因習によって女

子教育が十分に行なわれていないことを嘆いた。女子に高等教育の機会が少ない事を憂えた梅子は、女子教育の場所を作る事、これこそ自分の成さねばならないことなのではないかと考えるようになった。1891年（明治24年）には、ニューヨーク州オスウィーゴ師範学校で教授法を学んだ。南北戦争後のアメリカでは、国民的教育制度が形成された。普通教育を普及させ、充実するためには良質の教師の養成が必要であった。このためには優れた理論教授が必要であるとして、ヨーロッパに倣った師範学校（normal school）が実験的に設立された。梅子が学んだオスウィーゴ師範学校も、ヨハン・ヘンリック・ペスタロッター⁵⁵⁾の教育実践に倣ったものであり、それはエドワード・A・シェルドン⁵⁶⁾によって導入された⁵⁷⁾ものである。

華族女学校からの休暇が1年間延期されたのでプリンマー大学に復学し、トーマス・モーガン⁵⁸⁾教授と『かえるの卵の生育』についての共同研究を行った。この研究は1895年（明治28年）に『Quarterly Journal of Microscopical Science』に発表された。同年、彼女は『日本女性と戦争』という英文記事を新聞に投稿した。この大学における梅子の評価は、「親切、忍耐強さ、正確な知識、洞察力と器用な指先、想像力、そして科学的な正確さへの感情的なまでの愛」⁵⁹⁾であった。1892年（明治25年）、梅子はプリンマー・カレッジでの選科を修了して帰国した。

梅子は華族女学校に復職、1896年（明治29年）に『The Future of Japanese Women』を“The Far East”に発表した。1898年（明治31年）5月には女子高等師範学校教授を兼任した。6月にアメリカ・コロラド州で開催された万国婦人クラブ大会に日本代表として参加、同大会で講演をした。8月にはヘレン・ケラー⁶⁰⁾と会見した。アメリカ滞在中に英国著名人の連名で招待を受け、イギリスを訪問し、ケンブリッジ大学、チェルトナム・カレッジ（Cheltenham College）に滞在した。この時、てつと面会した。梅子は、1899年（明治32年）オックスフォード大学を訪問、セント・ヒルズ・カレッジ（St. Hilda's College）に1学期の間滞在して文学・倫理・歴史などを聴講した。

そして、梅子が帰国前にぜひ会いたい人物がナイチンゲールであった。梅子を招待した一人、ピッカーステス夫人がこの会見を手配してくれた。3

月になって、ナイチンゲールを訪問する機会が与えられた。梅子は会見時のナイチンゲールの様子を「足元に赤いシルクのキルトを置いた、真っ白なベッドの上に、真っ白の服の上に重ねた白い肩かけにくるまって、キャップをかぶり、枕で支えられて横たわっていたのは、輝く目をした婦人でした。目は活気と知性に満ち、顔はあまり老いてもいず、しわも少なく、昔の美しさがうかがえる顔でした。」⁶¹⁾と日記に書いている。ナイチンゲールの質問に梅子は、日本における看護の事情や女性の将来の展望について語った。ナイチンゲールから梅子に大きな花束が贈られた。この花の中から梅子は“すみれ”を押し花にして、大切に日本まで持ち帰った。4月には、英国からアメリカに渡り、7月に日本に帰国した。

帰国後、梅子は、1900年（明治33年）に華族女学校・女子師範学校を辞任し、女子英語塾を開設した。この英語塾開設には、捨松がアメリカで滞在中に世話になったベーコン家の娘アリス、トーマス博士、アナ・ハーツマン⁶²⁾などが協力した。そして、1903年（明治36年）には第一回卒業生を送り出すことができた。梅子が“実験”と呼んでいた仕事の節目であった。同年、“専門学校令”が公布されると即座に認可のための申請をなし、1904年（明治37年）に専門学校として認可された。

1905年（明治38年）、梅子は健康を害して教育から遠ざかった。しかし、日本YMCA初代会長に選出され、アメリカの会議に参加した。1907年（明治40年）にはフランクリン・デラノ・ルーズベルト⁶³⁾とその家族に会見する機会が与えられた。会見時、梅子は日本の教育の実情について話した。1915年（大正4年）にはこれまでの業績が評価され、勲六等に叙せられ、宝冠章を受けた。1917年（大正6年）、糖尿病発病、聖路加病院に入院した。1919年（大正8年）、脳出血を3回起こし、絶対安静を強いられた。1923年（大正12年）、関東大震災により5番町校舎が全焼した。バラックでの教育が再開されたが、ハーツマンのアメリカでの募金活動などによって再度、塾を再建することができた。1929年（昭和4年）、鎌倉の別荘で逝去（64歳）した。1933年（昭和8年）、梅子が慈しんで育てた女子英語塾は津田英語塾と改名された。

2. 日本の教育政策変遷過程における女子教育の位置づけ

梅子たちが渡米した“学制”期の教育は、為政者が理想とする国家を作るために、啓蒙主義的なものを持っていた。が、この頃は国民の教育に対する意識も少なく、食べるだけが精一杯の時期であった為に、特に女子に対しては、初等教育でさえ就学率は悪かった。又、江戸時代からの教育の問題として“男女7歳にして席をおなじゅうせず”といった考えがいく濃く残っていた時代であった。よって、政策的に“男女平等”を基本としても、永く教育されてきた日本人の気質が変われるわけではなく、地方によっては女児小学を別にするとところもあった。1876年（明治9年）、第一大学区府県教育議會において女子教育についての審議があった。その内容は「第一、女子ハ事理ヲ弁シ心思ヲ純粹ニシテ一家ヲ齊ヘ子女ヲ教育スルノ方向ヲ以テ教導スベシ男子ノ才氣発有為ノ志ヲ養成スルノ目的ト小異アルベシ」⁶⁴⁾といったものである。つまり、女子の教育は男子のように才気を促す教育とは相違するものであるから、女子に対してはその特性、すなわち、心が純粹で優しいという女性特有の特性から、家庭の方向に向けるように教育する必要がある。ゆえに、“学制”の有する男女平等の理念で教育が行われるべきではないとした意見であった。こうした審議会の教育方針を受けて、女子教育は裁縫を重視した家事教育がその中心になった。

梅子たちが渡米した1871年（明治4年）、アメリカにおける女教師の割合は61%に達していた。女子の小学校教育は、殖民地時代から実施されており、1790年代の就学率において男女間の格差はなかった。フランクリンの学校教育政策によって女子の中等教育が提唱され、独立戦争後は、家庭教育から教員養成の為の教育課程が編成された。南北戦争後の1870年代になると、女子の高等教育の整備がなされ、1882年（明治15年）には、初の博士号取得者がでている。

わが国の教育政策が儒教主義思想へ転向する過程で、一番影響を受けたのは思想的に目覚めた進歩的な女性達であった。アメリカに出発する際に心に刻んだであろう皇后の言葉、其方女子ニシテ、洋学修行ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候、追々女学御取建ノ儀ニ候ハバ成業歸朝ノ上、婦女ノ模範トモ相成候様心掛ケという言葉どおり、彼女達は学問に励み、西洋の流儀を倣い帰国した。彼女達がアメリ

カから帰国した際には女子教育に大いに貢献し、その模範になっていくことが期待されたのであり、そうあるべきだった。しかし、アメリカに渡った少女達はその教育終了後に帰国してみると、日本の女子教育の実情はむしろ後退したものであった。“学制”の頃の男女平等の教育は日本には馴染まないとして1889年（明治22年）“教育令”が發布されたが、翌年の1890年（明治23年）には“新教育令”が發布された。日本は政治・文化的に方向変換が成され、社会が大きく変化していたのである。同じころアメリカ留学を果たした捨末の兄、山川健次郎⁶⁵⁾には帰国後、すぐに教育の場と機会が準備されていたのに捨松、梅子らには何もなかった。

自身の受けたアメリカでの教育が日本では何等役に立たないと感じた捨松は、アメリカで滞在中に世話になったベーコン家の娘アリスに「現在のところ、私が就職できるような仕事はまったくありません。」⁶⁶⁾と書き、「ある政府の高官から結婚の申し込みを受けたことを以前にお話ししたのを覚えていますか。その方からもう一度結婚の申し込みを受けたのです。私はこの結婚を真剣に考えています。現在のところ、私が就職できるような仕事はまったくありません。教えることだけが今の日本が必要としていることではないと思います。今一番やらなければならないのは、社会の現状を変えることなのです。日本では、それは結婚した女性だけができることなのです。言い換えれば、教えることだけが日本を救う唯一の方法ではないということです。もし、私に教えることができないならば、日本にとって私はまったく役に立たないことになります。」⁶⁷⁾と手紙を書いている。後、彼女は陸軍大臣大山巖と結婚した。

帰国後、仕事がなく、苦悩と孤独の日々を送っていた梅子を気の毒に思った伊藤は、梅子を官邸に住ませ、妻や娘の英語教師をさせた。その後、梅子は華族女学校の開校と同時に伊藤の口利きで英語の教師になった。1888年（明治21年）に来日したアリスは、梅子と生活を共にしながら華族女学校の教師として、後には梅子の英語塾の教育に協力した。

伊東が第一次内閣組閣時に、初代文部大臣になった森有礼⁶⁸⁾は、キリスト教主義者であったため、儒教主義に対しては激しい批判を加え、修身教科書を廃止した。彼は“教育令”を廃止し“帝国大学令”に始まって“小学校令”に至るまで各

段階別の“学校令”を發布した。しかし、森は1889年（明治22年）、大日本帝国憲法發布式典当日暗殺された。森の死後、教育の理念をわが国特有の理念にしようとする動きが始まった。こうした国家体制による理念は徳育中心の理念として現れた。1890年（明治23年）には天皇の名において“教育勅語”が發布された。その教育政策の中で、ナイチンゲールは修身教科書に採用され、人道主義・博愛主義思想の持ち主と紹介されたのである。

1891年（明治24年）“中学校令”が「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス」^[69]と改正され、今まで、学校教育としての位置づけがなされていなかった高等女学校が、中学校と同格として位置づけられた。これは女子教育にとって画期的な出来事であった。当時の教育制度下では中学教育を受けた者以外、大学への進学はありえなかった。高等女学校が、中学校と同格として位置づけられたことによって、女子の高等教育への道が開かれたことを意味していた。更に、第二次山県有朋^[70]内閣は、“高等女学校令”を制定して、女子の中等教育の整備を計った。当時の高等女学校の数は官公立が9校、私立が6校であったが、この制度以降、高等女学校数は増加の傾向を辿り、1907年（明治40年）には官公立が108校、私立が25校になった。1897年（明治30年）には、女子大学設立に関する創立委員会が開かれる^[71]など、女子の高等教育は、益々その機運が高まり、その整備が叫ばれたが、大正時代に入っても実現は困難であった。

1903年（明治36年）には“専門学校令”が發布された。“専門学校令”における専門学校の定義は「高等ノ学科技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」^[72]である。技芸とは、美術や工芸など芸術方面に関わる技術^[73]とされる。高等の学科とは大学のような高等教育機関での学部を構成する単位である。つまり、専門学校とは高等教育機関で行う技術教育ということになる。もともとヨーロッパではユニヴァーシティ（University 総合大学）とカレッジ（College 専門学校または単科大学）が存在した。この“専門大学令”によって医学のような単一の学科を教育する学校の多くが専門学校として認可されたのである。そして、梅子も“専門学校令”が發布されると即座に、認可のための申請をなすという積極的な行動を成した。

進歩的な女性たちが社会進出し、大きなうねり

となろうとしていた1900年（明治33年）、日本政府は“治安警察法”を制定し、盛んになってきた労働運動を厳しく取りしまった。“治安警察法”は労働組合やストライキを禁止したものであるが、その第五条に「左ニ掲グル者ハ、政治上ノ結社ニ加入スルコトヲ禁ズ」^[74]と規定され、その中に軍人や警察官を含む公務員、教員、女性が入っていた。特に女子や未成年者は公衆の会合や政治的集会やその発起人たることが禁じられたのである。これによって女性は集会への参加のみならず、一切の言論の自由を奪われた。これら政府の言論の取締に対して、平塚らいてう^[75]は1913年（大正2年）“青踏”紙上で「彼等は化石を抱いて熱を与え無とする徒である。」^[76]と政府の女性に対する処置に対して反発した。家族制度を採用したわが国の女子教育政策は、儒教主義思想の徹底化によって一段と厳しい状況であった。

3. 津田梅子ーナイチンゲールから受けた影響

梅子ほどにナイチンゲールとの面会時の感動を如実に表現した者はいないであろう。日本では人道主義的・博愛主義者としてのナイチンゲールは、看護教育の開始や国際赤十字の加盟等によって既に知られていた。梅子は、ナイチンゲールに面会する機会を持てることを熱望していた。女子師範学校の教授を兼務していた梅子は、1898年（明治31年）にデンバー会議参加後に英国へ渡った。彼女は翌年の1899年（明治32年）に巷で出版されていた『ナイチンゲール伝』^[77]を片手に持ち、ナイチンゲールに面会した。

梅子は特別の計らいでナイチンゲールに面会できた時の感動を「忘れ難い訪れである。この病んでいる婦人のさかしく輝いた顔を私は容易に忘れる事はできませんまい。冴えた心眼、生き生きとした容姿は、とうてい80歳の老婦人とは思われない、驚嘆すべき婦人よ。」^[78]と述べている。梅子が面会をしたのは1899年（明治32年）であるから、ナイチンゲールが79歳の時である。しかし、梅子は80歳の老婦人という書き方をしている。日本式の年齢計算であればナイチンゲールは80歳であったろうか。ナイチンゲールが、聖トマス看護婦学校の見習い生たちに充てた書簡は1900年（明治33年）が最後であり、その前は1897年（明治30年）である。

1897年（明治30年）にナイチンゲールが見習い生たちに宛てた書簡には、「優れた看護婦は優れ

た女性でなければならない」⁷⁹⁾と書き、「優れた女性とは自分のもてる最上のもの—その知性 (intellect)、倫理的行動 (moral activity)、実践 (practice) のすべてにおける最上のものを患者に惜しみなく与える女性である」⁸⁰⁾と書いている。3年間のブランクの後の1900年 (明治33年) の書簡は実に短い。19世紀は女性の時代であるとの予言は全くそのとおりであり、女性の状況は年々良い方向に向かっていくと書きながら、「かつて女性は家庭に縛られている奴隷に過ぎませんでした。ところが今では女性は家庭の導き手なのです。その女性が放漫な“男女同権論者”となって、その資格を失う事のないようにしようではありませんか。」⁸¹⁾と書いている。そして、最後に見習い生たちに感謝の言葉が残された。

多くの改革を提言し、実行に移したナイチンゲールではあったが、最も成果が得られたのはやはり、看護教育であった。梅子が訪問したとき、ナイチンゲールは闘いの日々から解放され、過去を振り返っていたのであろうか。若き頃のナイチンゲールは、「なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないでいるのか？」⁸²⁾と述べている。このナイチンゲールの疑問は1846年 (弘化3年) のことであり、ナイチンゲールが父親に宛てた手紙の一文である。その一方で、ナイチンゲールは『カサンドラ』⁸³⁾の冒頭に“早すぎた目覚め”の悲痛な心情を表し、女性が「知性、倫理的行動、情熱という3つの徳を兼ね備えていながら、なぜ社会においてその3つのうちのの一つもいかせられるような場所を見つけれられないのか？」⁸⁴⁾とも述べている。そして、『ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス』⁸⁵⁾、『ナイチンゲールとミルの論争—ヒューの論文を手がかりに—』⁸⁶⁾等でも報告したように、『カサンドラ』でのナイチンゲールは宗教的な概念を強く強調しながらも、“伝統的な社会”の冷酷な現実の中で、伝統的な規制に女性が服従している無意味な生活を繰り返し述べ、女性が自己の生活も調整できないで、心霊的にも精神的にも貧弱な生き物になっていると指摘した。そして、女性たちは「家庭内の白色奴隷」⁸⁷⁾であると言及した。

特にナイチンゲールが最も言いたかった社会へ

の告発、それは男女間における時間の使い方の相違についてであった。この後も何かにつけて男女間の“相違”はナイチンゲールの主要な課題であった。ナイチンゲールは「男性の時間は女性の時間よりも貴重なのですか？それとも男性と女性との相違は、女性は何もする事はないと自ら認めていることなのですか？」⁸⁸⁾と述べている。ナイチンゲールは更に女性の仕事に関して「女性には“子供に乳をやる”事を除いては、邪魔をしてはならないほどに重要な仕事があるはずはないと思っています。」⁸⁹⁾とも述べた。ナイチンゲールは女性達がこれを受け入れてきたと述べ、社会が女性の知性を浪費していると激しく告発した。さらに、男性にとっても女性にとっても、家庭は不滅の精神の発展する場としては狭すぎるのです。その小さな範囲では、不滅の精神を持った人が、創造主から授かった資質や才能によって運命づけられている仕事を行う機会は万に一つもないのです⁹⁰⁾と述べた。

家庭は創造主から授かった能力を使う場ではなく、天職として神が授けたその能力を使う機会もないと家庭生活を非難しながら、ナイチンゲールは、現時点において女性の知性は満足できないものであると告発し、幼児期にそうした強制不能な精神が形成されると言及した。ナイチンゲールの考えでは、男女間に従属関係は存在してはならないのであった。女性が神の直接の僕であるならば、神が求める仕事を女性も行っていはいはずである。神が求める仕事とはいったい何？それは人のために役立つ仕事であり、社会に奉仕することであった。それこそがナイチンゲールにおける美德であった。つまり、ナイチンゲールの考えでは、勤労の精神こそが自己を守る唯一の手段であった。男性にしても女性にしても自分の力で生きていく必要があり、それは健全な勤労の精神でもたらされるものであった。

ナイチンゲール自身『カサンドラ』の中で、女性達は家庭における役割以外に道はないと考えている現実の間違いを指摘し、母親達に“目覚めよ、目覚めよ、英国の女性たちよ目覚めよ！”と著作の中で英国の女性達に呼びかけている。それはわが国の女性として一早くアメリカで教育を受け、思想的にも外国の影響を受けた梅子にしても同様であったろう。一般に無学な女性達あるいは女大の教育を受けてきた女性達は、わが国の社会の中で、伝統的に引き継がれてきた女性の役割や女

性に対する一層低い位置づけなどに関して何等矛盾を感じないでいられたに違いない。一部の進歩的な考えを持った人達を除いては西洋においてもそれは同じであったろう。梅子と面会をした頃のナイチンゲールは、看護教育をすることによって実践的な女性解放主義者と称されるに相応しい人物であった。

もちろん、日本の梅子との面会の事実は、ナイチンゲール関係の伝記本には見出せない。しかし、梅子の生涯史に引用された、梅子の日記の記述内容からは衝撃の強さが読み取れる。梅子が日ごろ考え悩みぬいていたこと、それは日本の女子教育の実情であった。梅子が、かつて奉職した華族女学校における教育は、しとやかで美しく、人形のような可愛さを求めるが、他方、知的には生ぬるいものであった。わが国における社会的地位のある女性達への教育に対して、梅子は自身が求めている女子教育ではないと直感的に感じたのであろう。看護における科学的思考 (scientific thought) の過程は人々の日常生行動は科学的思考の過程である。チャールズ・ダーウィン⁹¹⁾ に代表されるように、ヴィクトリア女王治世下のイギリス社会は科学黄金時代の幕開けであり、そうした影響下のアメリカは、生物学的研究が優勢であった。梅子が、プリンマー大学でなした『かえるの卵の生育』についての共同研究成果と、この大学における梅子への、正確な知識、洞察力と器用な指先、想像力、そして科学的な正確さという評価は、梅子が科学的思考の持ち主であったことが伺える。恐らくナイチンゲールと梅子両者は、女性の生き方に対して率直に語り合ったのであろう。

梅子は、イギリスから帰国後の1900年 (明治33年)、予てから考えていた女性のための高等教育の場所として女子英語塾を設立した。梅子は自己の生きる意義を女子教育推進の中に見いだしたのである。彼女は、女性の地位が向上する為には教育が必要であり、日本が国際社会で真に重要な地位を得るためには、女性もその権利を認められるべきであり、そして社会に貢献する力となるべきであると考えた。ナイチンゲールが女性として結婚するという事だけではない、新しい女性の生き方を見つけ出した様に、梅子も自己の人生において理想の追及をする道を自身で選択したのである。そして、その方法は高らかに女性解放を主張するのではなく、ナイチンゲール自身が著作『看護

覚え書』に書き、そして実践したように、自己の信念を貫き通す覚悟で黙々と神の道につづく多くの仕事を、確実に為したということである。

梅子が経験した華族女学校における教育は、ナイチンゲール以前のヨーロッパでも同様であった。ジョージ・ゴードン・バイロン⁹²⁾ やウォルター・スコット⁹³⁾ に代表されるように、男性に保護されるような弱々しい女性が理想的とされていたからである。しかし、ナイチンゲールの社会改革以降は、女性であっても社会に何等かの貢献ができる女性が望ましいとされる風潮が優勢となった。つまり、ナイチンゲールの社会改革は理想的女性像までも変えてしまった⁹⁴⁾ のである。梅子が女子教育に科学性を求め、社会的貢献を求めたことと、ナイチンゲールが女性を教育して社会に有用であらしめようとした理念とは互いに合致するところである。

■ 安井てつ

1. 安井てつの生涯

東京女子大学学長であったてつもまた、ナイチンゲールに面会することができた数少ない日本人の一人である。てつの生涯については『安井てつと東京女子大学』⁹⁵⁾、『安井てつ伝』⁹⁶⁾、『若き日のあと—安井てつ書簡集』⁹⁷⁾を参考にした。

てつは、梅子がアメリカに渡る前年の1870 (明治3年)、東京牛込に生まれた。1876年 (明治9年)、仰高小学校に入学、翌年には本郷誠之小学校に転校した。1881年 (明治14年)、東京女子師範学校予科五級に転校した。翌年、予科が廃止され、付属高等女学校が新設されたために、相応級に編入することとなった。1884年 (明治17年)、東京女子師範学校に入学し、寄宿舎生活を開始した。1886年 (明治19年)、東京女子師範学校は高等師範学校となり、1890年 (明治23年) 高等師範科を卒業した。1892年 (明治25年)、岩手県尋常師範学校に赴任、1894年 (明治27年)、女子師範学校訓導に任ぜられた。この年、日清戦争が勃発した。1895年 (明治28年)、てつは、樋口一葉⁹⁸⁾ 門下生となった。

1896年 (明治29年)、教育学・家政学研究のため、3年間の英国留学を命じられ、留学準備のため梅子宅に寄宿した。1897年 (明治30年)、1月に横浜を出航し、3月にロンドンに到着した。英国ロチェスター・ハイスクールでは、家政学の教授法

を研究した。日曜日ごとに教会の礼拝に出席した。10月からは、ケンブリッジのトレーニング・カレッジ (Cambridge Training College) でエリザベス・ヒューズ⁹⁹⁾ から教育学・教育史を学んだ。ヒューズはイギリス女子教育に多大な影響を与えた人物である。てつが、ヒューズから受けた影響は多かったと考えられ、ヒューズとは永い親交を結んだ。又、ヒューズ自身にとっても、てつの存在は大きかったと考えられ、日本に滞在した経歴を持つ。

併せて、ユニヴァーシティ・トレーニング・カレッジでは心理学を研究した。1899年(明治32年)6月にヒューズと共にスイスに滞在し、10月からオックスフォード大学で心理学を研究した。同年、梅子もオックスフォード大学を訪問、セント・ヒルダス・カレッジ (St. Hilda's College) に1学期間滞在、文学・倫理・歴史などを聴講している。そして、3月にはてつも、梅子と一緒にナイチンゲールを訪問したのではないかと考えられる。というのは、てつが、ナイチンゲールに面会したと姉上に手紙を書いているのは1899年(明治32年)6月10日であり、てつは、文中、「先日ミス・ナイチンゲールに御目にかかり候、実にきれいな老婦人にて老病の上にすわり居られ候、津田氏より詳しき御話あらん、」¹⁰⁰⁾ とナイチンゲールと面会した事実を書き送っている。梅子から詳しい話をと書かれていることから、恐らく、てつが、ナイチンゲールに面会したのは梅子と一緒にであったと考えられるからである。梅子がナイチンゲールと面会したのは、1899年(明治32年)3月であった。

梅子は4月には英国からアメリカに行き、7月には日本に帰国している。てつも、7月には日本に帰国した。帰国後、てつは、女子師範学校教授兼舎監に任ぜられた。1904年(明治37年)、てつは、シャム国政府の招聘により同国の女子教育に参画した。この年、日露戦争が勃発した。1907年(明治40年)、シャム国皇女女学校での教育期間が満了したために、渡英し、ウエルズ大学で倫理学やギリシャ哲学・英文学を学んだ。1908年(明治41年)、学習院講師を任ぜられるが、1909年(明治42年)には学習院講師の職を辞し、梅子の英語塾を助けた。4月から『新女界』の主筆となった。『新女界』というのは、日清・日露戦争前後、東京・本郷教会の海老名弾正¹⁰¹⁾ によって発行されたキリスト教啓蒙誌である。

てつは、1912年(大正元年)、東京女子師範学校教授に就任したが、1917年(大正6年)には、同職を辞した。11月、東京女子大学設立の準備に向けて協力を要請された。1918年(大正7年)、東京女子大学学監に就任した。同大学学長は新渡戸稲造¹⁰²⁾ であり、国文科、英文科、人文科、実務科一部・二部を置いた。1919年(大正8年)、新渡戸学長や後藤新平¹⁰³⁾ らの欧米視察に同行した。次いで、国際連盟事務局次長に就任した。帰国後の9月、新渡戸が名誉学長に就任したため、その後任として東京女子大学学長に就任した。

同年、関東大震災がおきたため、1924年(大正13年)府下井荻村に校舎を移転させた。1928年(昭和3年)共産党一斉検挙が起きた。1933年(昭和8年)、新渡戸学長がカナダで客死した。1937年(昭和12年)には、津田英語塾、日本女子大学、東京女子大学合同でヘレン・ケラー女史の講演会を開催した。1940年(昭和15年)、東京女子大学学長を辞し名誉学長となった。1941年(昭和16年)、太平洋戦争が勃発した。1944年(昭和19年)、外出の際に左脚を骨折し入院、1945年(昭和20年)3月には退院したが、歩行困難は持続した。10月、自宅廊下にて転倒、右腰骨折、荻窪衛生病院に入院したが、腹膜炎を併発し、12月死亡した。76歳であった。

2. イギリスにおける女子教育の実情

さて、てつが留学したイギリスの女子教育はどうであったのか。てつは、1897年(明治30年)からケンブリッジ・トレーニング・スクール (Cambridge Training College) に学んでいる¹⁰⁴⁾。同校は、1885年(明治18年)にケンブリッジに創設された師範学校である。初代校長は、てつが学んだヒューズである。

イギリスにおける教育実情はB・サイモンの『イギリス教育史』¹⁰⁵⁾ やT・H・グリーン『イギリス教育制度論』¹⁰⁶⁾、S・ハンフリーズの『大英帝国の子どもたち』¹⁰⁷⁾、『イギリス公教育の歴史的構造』¹⁰⁸⁾ に見る事ができる。更に、チャールズ・ディケンズ¹⁰⁹⁾ の『ディビット・コパフィールド』¹¹⁰⁾、シャーロット・ブロンテ¹¹¹⁾ の『ジェーン・エア』¹¹²⁾、トマス・ヒューズ¹¹³⁾ の『トム・ブラウンの学校生活』¹¹⁴⁾ などの自伝的小説などでも検証することができる。又、実証主義哲学の立場から社会問題と女子教育について鋭い提言をしたのは、ナイチンゲールと陸軍の改革でコンビ

ネーションを組んだハリエット・マーティノウ¹¹⁵⁾であった。これまで女子教育は家事程度の教育内容であり、家庭内でその役割が果たせるための教育が主流であった。女子教育の本格的な改革はナイチンゲール以降であり、主としてドロシ・ビール¹¹⁶⁾によって為された。

イギリスにおける女子教育の実情は、『ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ』¹¹⁷⁾、『ナイチンゲール教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答えを要求する』¹¹⁸⁾でも報告したように、労働者の教育が置き去りにされたことにも増してお粗末なものであった。通常、ナイチンゲールの様な上流社会の子女達は学校へは行かずに家庭において教育されるのが通常であった。そして、ある一定期間家庭で教育された後、無秩序な寄宿舎付きの私立学校で教育された。その教育は礼儀作法や音楽、ダンス等社交界に必要な教育および家政的な教育が主流であり、その内容も一貫していなかった。労働者階級と女子教育は階級と性の二重差別構造があったことも否めない。

1846年（弘化3年）にナイチンゲールが父親に宛てた手紙、「なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないでいるのか？」という内容からも分かるように、この当時の女性たちは無学・無知なものが多かった。しかし、この当時、高い学識を持ち得たナイチンゲールの存在の方がむしろ特別であった。一般的な女子教育は良妻賢母主義思想が反映され、行儀作法や家政中心主義であった。この教育に関わったのがガヴァネス（Governess）と呼ばれる家庭教師（以降、ガヴァネスとする。）である。しかし、その教育実践ができる者は限られた人達であり、一般大衆は無学なものが多かった。

宗教団体は貧民保護のために犯罪者や負債を負った人々が、難を逃れる緊急避難場所的性格を持つアサイラム（Asylum）と高齢者・孤児・病人など世話が必要な人々の一時宿泊所あるいは養育院的性格のホスピタル（Hospital）という二種類の施設をつくった。中世から存在していたこのアサイラムは、18世紀末には狂気を根絶するための施設として考えられるようになった¹¹⁹⁾。アサイラムに狂人を収容して、治療的な側面に関わっ

た最初の人物はウィリアム・バットイ（William Battie）である。バットイは1751年（宝暦元年）の時点で、アサイラム、ロンドンの聖ルカ病院を創設した医務官である。また同時に彼は二つの大きな私立の狂人の家の所有者であり、医学専門学校の校長でもあった。バットイは治療上の長所をアサイラムに帰しており、一種の隔離療法によって患者の回復が可能であると考えた¹²⁰⁾。しかし、当時、多くの精神障害者たちは救貧院に収容されていた。キリスト教的救済としての宗教的性格が強かったこれらの施策に対し、国家が介入した救貧法では、不労生活者は犯罪者もしくはその予備軍として扱われた。ゆえに、国家の安全を脅かす者に対しては、他の人々から隔離して懲罰や教育を与え、その性格を改造しようという意図がアサイラムの設立目的にはあった¹²¹⁾。

イングランド最初の女子基本財産学校（Endowed School）における教育では、女子は女中見習いとして、自分や男子生徒の服とシャツを縫い、家事を学ぶことが学習課題であった。この学校はクライスト・ホスピタル（Christ's Hospital）という孤児院兼教育施設の付属学校であった¹²²⁾。ナイチンゲールが看護婦学校を付属させたセント・トマスホスピタルもトマス・ア・ベケット¹²³⁾ゆかりの施設であったが、エドワード6世¹²⁴⁾の基金を受けたロンドン市長が、貧民対策として高齢者と病人を収容するホスピタルにした。セント・トマスホスピタル（以降、聖トマス病院とする。）は後に今日の病院の機能を果たす施設になった¹²⁵⁾。ちなみにナイチンゲールが看護教育を開始しようとしたとき、イギリスで看護婦の教育を行っているところは皆無であったから、ナイチンゲールは既存の病院を看護教育の場にする事とした。これに選ばれたのが聖トマス病院である。ナイチンゲールが、ロンドン中の病院を観察した結果、全ての病院が欠陥だらけであった。その中で、聖トマス病院は当時としてはかなり、優れた施設であった。しかし、ナイチンゲールが特にこの病院を選択した理由は他にもあった。それはまず、この病院に移転の話が持ち上がっていたことである。『病院覚え書』¹²⁶⁾にも示されたように、病院構造の原則は、人の健康を害する事のない衛生的な病院建築が求められるものであり、そのことが配慮された病院の建築はぜひとも必要であった。ナイチンゲールによれば、パビリオン方式と呼ばれる建造物は一つ一つが独立して

おり、病院としては主体となるどの部分も空気の流通がないパビリオン方式の建築法が好ましいのであった¹²⁷⁾。病院が病気の人を入院させて回復に向けて働きかける場であるとしたら、そこには感染症の者も入院させる可能性があるということになる。その場合、パビリオン方式で建築されていたら、院内感染を防ぐことができる。つまり、空気による感染経路を遮断することができる。ナイチンゲールは考えた。そして、病院の内部構造についてナイチンゲールには、床や壁の素材、ベッド間隔、給水や排水他、事細かい理想が限りなくあった。聖トマス病院の新築計画には彼女の病院建築構想が反映させられる可能性があったからである。

初等教育に関わる教育者教育は19世紀半ば頃から普及し始めたが、これも貧民の子が対象であった。女性が男性と同じ社会的地位を確保できる唯一の例外は、学校教師への道であったが、女教師には十分な教育の保障をしなかった¹²⁸⁾。教育内容はブロンテの著作『ジェーン・エア』で記した様な内容である。それは“読・書・算”の他に音楽、図画やフランス語といったような科目であった。それもやはり令嬢教育ができる為の必須条件であり、主として社交の場で必要なマナーや会話に必要な知識が中心であった。権利や義務には無関心で社交に明け暮れている女性達に対してナイチンゲールは「知性の足だけが前に進んで来ているのであって実践の足は後ろに残ったままの状態である。その意味で女性は斜めにたっている現状なのである。即ち、行動の為の女性の教育は知識の為の教育と足並みを揃えていない。」¹²⁹⁾と考えた。

上流社会の人達が高い教育を受けていても、それを何等社会に役立てるわけでもなく、ただ、お互いに“知っている”事をひけらかし、競争するだけの為に存在する教育、その教育によって知識を集めていることが非常に無意味であるとナイチンゲールは考えた。彼女が父親に当てた手紙同様、理論 (theory) と実践 (practice) は一致していなければならない、知識 (knowledge) と行動 (action) とはバランスが取れていなければならない。ナイチンゲールの考えでは、そうした知識はそれを必要とする者の為に役立てなければ何にもならない。即ち、行動する事が大事であった。しかし女性達に働く場所は開放されておらず、その選択権もなかった。働きたいという情熱を有

し、それなりの知性もあり、道徳的行動という徳性を具有している女性がなぜ、社会でこの徳性が生かされないか？『カサンドラ』におけるナイチンゲールの主張は、当時の社会における女性に与えられていた権利や役割に対する挑戦であり、彼女の強い意志の現れでもある。

勿論、理論と実践の不一致、知識と行動とのアンバランスという現象は、紳士である男性にも同様なものがあつた。サイモンの『イギリス教育史』¹³⁰⁾によれば、紳士というものはヨーロッパの古典や歴史に通じていれば良かったのである。つまり、働くように教育されるものではなかった。そして、その教育方法も、ジョン・ロック¹³¹⁾の『教育に関する考察』¹³²⁾やジャン・ジャック・ルソー¹³³⁾の『エミール』¹³⁴⁾に代表される様に、当時一流とされた家庭教師によって行われるのが通常であった。又、中等教育としては宗教団体によってグラマー・スクールが開設されていたが、これも主としてラテン語やギリシャ語の教育をしていた。これらグラマー・スクールやパブリック・スクールは高等教育機関に入る為の予備校的存在であった。高等教育機関として当時のイギリスでは、オックスフォード大学やケンブリッジ大学が存在した。本来、この教育機関はキリスト教の牧師養成がその主な目的であったが、そのうち、宮廷人や上流社会の師弟をも入学させるようになっていたのである。サイモンによれば教育改革は、18世紀後半に始まっていたが、1848年 (嘉永元年) 頃には、ナイチンゲールの友人でもあり知人でもあったオックスフォード大学のギリシャ語教授、ベンジャミン・ジョウエット¹³⁵⁾等によって改革が推進された。筆者らが『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに』¹³⁶⁾で検証したように、トマス・アーノルド¹³⁷⁾のラグビー校における教育改革も、基本的には個人の人格形成が目的であった。

労働者階級における教育は、読・書・算も十分に教育されず、家庭内で子女教育が出来るほどにも教育されておらず、全体的に習熟度は低かった。その上、公教育も整備されていなかった。その教育者も養成されていなかった。1820年代には多くの私立学校が設立されたが、これらの多くは“単なる少年院”であった。グリーンによれば、この頃の個人学校では教授用の備品たるや棍棒のみといった類¹³⁸⁾の学校であった。程度の低い教

育は、ディケンズの自伝的小説『ディビット・コパフィールド』に辛らつに風刺されている。同著にはろくでなしの人物が学校教育者になっており、生徒達が鞭打たれていた。そこでは子供達を虐待するのが教育であると誤認識しているかのような教育の様子が描写されている。次に、工場の労働者として年少の子供達が駆り出されるようになり、その道徳性の欠如から、児童達に教育の必要性が叫ばれた。子供達の集団における道徳性の問題に呼応したのはまずは宗教家達である。それは宗教教育という形式で実施され、慈善家による日曜学校がまずスタートした。

1830年（天保元年）ごろからチャーチスト運動¹³⁹⁾という教育改革運動などが展開された。彼らの主張は教育が極めて重要であること、それを慈善でなく、権利として公的に拡充することが必要であるとのことであり、政治的活動として展開された¹⁴⁰⁾。カール・マルクス¹⁴¹⁾は『資本論』の中で、男または女の学校教師によって十字架を持ってサインされた通学証明書が珍しくなかった¹⁴²⁾と述べており、居並ぶ児童達がまったく何もしていなかったと述べている。教育者である教師事態、無学なものが多く、教師として相応しい知識を有していなかった為、通学証明でさえ十字架のサインしかできなかったと彼は述べる。つまり、これは民衆教育のための教育者不在を提示したものである。教育の改革は上から下へ、さらに下から上へと進み、さらにその教師の質にも手が入られようとしていた。続けて大衆教育として一度に多数の教育が実施できると評価された教育方式が出現した。教育学者アンドリュウ・ベル¹⁴³⁾とジョセフ・ランカスター¹⁴⁴⁾によって開発されたのが“助教方式”という教育方法である。しかし、年長者が年少者を教育するといったその教育方式はたちまち、その教育の粗悪さが指摘されるようになった。

救貧法行政官であったケイ・シャトルワース¹⁴⁵⁾は、その公教育論の中で「労働者階級を無知から解放するために、世俗的教育、取り分け政治的教育を行う事であり、それには彼らを宗教的影響下に置くことにより、宗教的、道徳的心情を啓発する事である。」¹⁴⁶⁾と述べた。彼は1838年（天保9年）にランカスター派の学校の有害さを指摘¹⁴⁷⁾し、新たな教育方法を模索する為にドイツ、スイスなどの教員養成の実際を見聞した。ドイツでは1726年（享保11年）頃からワイマールに設立

された教員養成学校が最初であり、18世紀末には30校位の教員養成学校が存在していた。1802年（享和2年）頃から義務教育制度が始まり、1806年（文化3年）のナポレオン戦争後から国民教育が開始された。その教育政策にドイツ政府は、ペスタロッチーの教育方法とその精神を採用したのである。ペスタロッチーの“神の下での平等”思想はその教育実践に現れ、著作『隠者の夕暮れ』¹⁴⁸⁾にも示された。ペスタロッチーの教育は、いかに道徳的に貧民の子どもたちに道徳を教えるかであり、彼はその実践から“民衆教育の父”と呼ばれた。民衆教育が孤児救済の形で始まった事もあり、その教育に当たる教師には“教育愛”的関わりが求められ、その資質は聖職者の要素が強かった。ゆえに、学習の対象である子どもたちと寝食を共にするという教育は必然的に寄宿舎制度を導入させ、教員養成に必要不可欠な要素となった。

ヨーロッパにおける国々が、ペスタロッチー理論による教育を実施していることに感銘を受けたシャトルワースは、イギリスでもペスタロッチー理論に基づいた教員養成をなすべきことを痛感した。1839年（天保10年）、視察から帰国したシャトルワースは、ロンドン郊外のパターシーで開校の準備をし、1840年（天保11年）に8名の貧困孤児を迎え入れ、教育を開始した。この教育方法が“見習い制度”による教育方法の始まりである。この教育方法が良い成果を得たことから、1847年（弘化4年）にトーマス・バビングストン・マッコリー¹⁴⁹⁾は「他のあらゆる職業から見捨てられた人、解雇された馬丁、零落した行商人、比例式の計算のできない人、地球が球か立方体かを知らない人、エルサレムがアジアにあるかアフリカにあるかを知らない人、おおよそ、我々が地下室の鍵を安心して任せようとはしないような人々に対して我々は来るべき世代の魂、わが国の自由と幸福と栄光を背負う魂を委ねてきた。」¹⁵⁰⁾と述べた。

民衆教育同様、問題であったのは女子教育である。ガヴァネスによる教育はヨーロッパの伝統的教育であった。しかし、ガヴァネスの粗悪さは17世紀のフランスの聖職者作家フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェヌロン¹⁵¹⁾によっても指摘されている。彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事、また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた。フェヌロンは1681年（天和元

年)、『女子教育論』¹⁵²⁾を著した。わが国は五代將軍徳川綱吉の統治時代である。同著で彼は、「軽薄で生活程度の良くない無思慮な精神の持ち主たる女性が、家庭教師となって、彼女自身が受けてきたであろう悪い教育を、娘達に与えている。」¹⁵³⁾と述べ、生活程度の良くない無思慮な女性達が行う教育は、母親が数年間かけて教育したことを、8日間で軽薄な生活程度の良くない無思慮な精神の持ち主に変えてしまうと警告している。続けてフェヌロンは「女の子の教育ほどなおざりにされているものは何一つない。そこでは慣習と母親のきまぐれとがしばしば全てを決定している」¹⁵⁴⁾と述べ、女子教育の必要性を説いた。フェヌロンは粗悪なガヴァネスによる教育は、必ず娘達に悪影響を及ぼすと述べ、母親になるであろう女性達に十分な教育を与える事が、子女の健全な発達に最も望ましいと考えた。そして、彼は、女性に知的探求心を授ければ夫に理屈を捏ねる事のみを覚え、夫に従うことができなくなるから、女性に教育を授ける必要はないという従来の考え方を否定し、当時優勢であったキリスト教思想の規定概念の中で、子供を育てる女性こそ教育されるべきであると主張した。その教育は良妻賢母主義教育といわれ、ヨーロッパの伝統的教育となった。

ジェレミー・ベンサム¹⁵⁵⁾の「女性の幸福と利益は男性のそれと同等である」¹⁵⁶⁾との考えを継承していたナイチンゲール氏¹⁵⁷⁾は、ナイチンゲールの知的好奇心を満足させるべく当時の男性同様、あるいは当時の男性よりも優れた教育を受けさせた。この父親の教育を通して知的に育ったナイチンゲールは、高い視野を持った女性に育った。彼女の知性は、女性達に課せられた運命を矛盾として受け止めた。そして、その矛盾はナイチンゲールの心に重くのしかかり、その心はイギリスの有している社会的課題に対して解決を求めるようになった。そして、ナイチンゲールの有する情熱が解決のための方策を導き、行動となって現れたのである。当時の女性達の多くが受け入れてきた伝統的な生き方に対して、女性であっても理想を持って生きる必要があるのだと賢明に主張した。しかし、ガヴァネス達は教育者としての教育がシステム付けられていたわけでもなかったから、その資質も十分ではなかった。

ガヴァネスの資質の問題も問われたが、上流社会特有の偏見と蔑視の態度も問題がなかったとはいえない。ブロンテの自伝的小説ともいわれる

『ジェーン・エア』には、慈善学校(Charity School)的性格の教員養成学校の様子が描写されている。キリスト教の質素と儉約をモットーとしたこの慈善学校の粗悪な食事、寄宿舎の不衛生さは、感染に弱い子供達を作り出した。そして一度、病気が発生すると栄養失調の子供達は次々と感染し、死亡するという痛ましい結果を引き起こした。そうした学校の多くは後に、管理上の欠点を指摘された。特にこの様な問題を引き起こしていたのが当時の慈善学校であり、その学校の性格であった。人に施しをする側の人間と人の施しで教育を受ける側の人間という関係が、人に対する偏見と蔑視の感情を持たせ、屈辱的な言葉を相手に与える事になろう。

ブロンテは著作の中で、上流婦人達に家庭教師の事を「あの連中の無能と気紛れ」¹⁵⁸⁾と発言させ、さらに、ロチェスターに「家庭教師などという奴隷状態」¹⁵⁹⁾と発言させた。これらはガヴァネス達の無能さと上流社会のガヴァネス達に対する偏見を告発するに相応しい。この事からも察せられるように当時、ガヴァネスの評価がいかに低かったかである。これは女子教育の不十分さがその能力低下に結びつuitたと考えられたが、基本的には働かなければ食べてはいけない女性達に与えられた社会的評価でもある。

ナイチンゲールの時代、結婚できない中・上流社会の女性達は、娘時代に受けたわずかばかりの教育を糧にガヴァネスとして生計を立てた。その待遇は「奴隷状態」の扱いであり、その報酬はわずかであった。ナイチンゲールが家族から独立した1853年(嘉永6年)、看護監督官として働いた婦人病院の、多くの患者が女教師であり、看護にあたっている者の多くが売春婦であった。この頃の売春婦は、トレヴェリアンが「世間一般の倫理規範は極めて厳格だった為に、一度純潔を失うと売春へ追いやられることが多かった。」¹⁶⁰⁾と述べたように、倫理規範が極めて厳格の時代にあっては、一度純潔を失うと売春宿へ売られる場合もあったから、売春婦が必ずしも下層階級であるとは限らなかったようだ。

ナイチンゲールは、知人に「教育のある婦人の惨めな社会的地位に対して深い同情の念を抱いております」¹⁶¹⁾と述べている。教育者として尊敬されているわけでもなく、偏見と蔑視の中で女性達は職業に対する愛着も感じられないまま自尊心も持てず、将来への不安から神経症になっていった

のであろう。そして、ナイチンゲールは「私たちは身体を扱う事を、魂を扱う事より高い位置におくので、医師は学校の教師より高い地位に就くことになります。ガヴァネスは主より与えられた資質を残らず持ち合わせていなければなりません。女性は人々を教えられるように自分達に教えてくれる教育を切望しています。」¹⁶²⁾と述べ、女性達が人に教えられるようになる事、つまり、教育者としての教育を切望しているにも関わらず、その教育が不完全であることを指摘した。そして、このガヴァネスの救済のために始まったのが、19世紀の女子教育改革運動である。

『イングランドの女子教育研究』¹⁶³⁾によれば、この女子教育改革運動の最終ゴールは女性に大学教育の機会を与えよというものであった。イギリスにおける女子中等教育のパイオニアの一人であると称されるビールは、ジョン・フレデリック・デニソン・モーリス¹⁶⁴⁾がキリスト教社会主義思想を基盤に、1848年（嘉永元年）に創設されたクイーンズ・カレッジ（Queen's College）の第一回の卒業生である。ビールは、チェルトナム・レディーズ・カレッジの教員養成部門として、1885年（明治18年）にセント・ヒルダス・カレッジを設立した。ビールの、精神と肉体を結合する精神主義的教育は、イマヌエル・カント¹⁶⁵⁾やフレデリック・フレーベル¹⁶⁶⁾、ヨハン・フレデリック・ヘルバルト¹⁶⁷⁾等のドイツ観念論哲学と教育学理論によって補強され、精神的なものと実際の調和があった¹⁶⁸⁾。

ビールの教育実践は、「外面を飾らず内面を磨け」という当時の女性たちを支えたキリスト教精神であり¹⁶⁹⁾、ナイチンゲール同様に社会的な福音主義の精神が宿っていた¹⁷⁰⁾。福音というのは、キリスト自身の人格、言葉、業績を表す。よって、福音主義とは聖書の福音の真理に立ち返り神より与えられた恩恵としての信仰を主張する立場である。福音主義の立場にたつビールは、自身の教育の中で、競争と試験を重視せず、ベストを尽くすことを好んだが、女性に知性はいらぬとする偏見に対しては敢然と闘いを挑んだ¹⁷¹⁾。ビールの主義主張は、ナイチンゲールも競争と試験を重視しない立場を保有し、その考えが看護婦の国家試験問題で執拗に反対したところである。

1869年（明治2年）にケンブリッジ高等地方試験に合格する為に開放されたマートン・ホール（Merton Hall）は、1875年（明治8年）にニュー

ナム・カレッジ（Newnham College）となった。1880年（明治13年）にケンブリッジのカレッジとして認められたが、学位は授与されなかった。女性の大学入学を最初に開いたのは、ロンドン大学である。ロンドン大学は1836年（天保7年）に学生を持たない試験委員会として設立され、ユニヴァーシティ・カレッジとキングス・カレッジの卒業生に学位を授与する試験を行っていた。1878年（明治11年）には、傘下のカレッジの全てに女子学生を正式に受け入れ、女性にも学位が授与されるようになった。

1885年（明治18年）にガートンとニューナムの卒業生を受け入れる為の高等師範学校として、ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ（Cambridge Training College）が創設された。ここの初代校長がヒューズである。次に、このケンブリッジのトレーニング・カレッジは、ケンブリッジ大学のカレッジのひとつとして吸収された。1879年（明治12年）から、教員養成シンジケートを作った。このコースは女性にも解放され、教育の歴史、理論、実践を教える講座であり、名実ともに、イギリスにおける教育学講座であった¹⁷²⁾。1897年（明治30年）、ロンドンに到着したてつは、このケンブリッジのトレーニング・カレッジで、ヒューズから教育学、教育史を学んだ。

さらに、てつは、オックスフォード大学で心理学を研究している。ビールが1885年（明治18年）に設立したチェルトナム・レディーズ・カレッジには、イギリス初の女性教師養成学校としてセント・ヒルダス・カレッジが創設されていた。後、この教員養成学校は、オックスフォード大学のカレッジに吸収された。最初、ビールはこの教員養成学校に協力したが、1893年（明治26年）には、女性教師向けにオックスフォード大学内にセント・ヒルダス・ホール（St. Hilda's Hall）を別に設置した。ゆえに、てつが、ロンドンに留学したころの女子教育は相当に進歩していた。しかしながら、てつが、学んだオックスフォード大学が女性に学位を授与するのは1920年（大正9年）になってからであり、ケンブリッジ大学は1948年（昭和23年）である¹⁷³⁾。てつは、1923年（大正12年）、日米親善、米国女子高等教育視察のため訪米し、米国マウント・ホリヨーク・カレッジ（Mount Holyoke College）からドクトル・オブ・リテラチュアの学位が授与された。ちなみに、アメリカでは、1882年（明治15年）に、ラドクリフ大学が

女性に対して初の博士号を授与している。

最後にてつは、ロチェスター・ハイスクールで家政学の教授法を研究している。イギリスにおける女子中等教育の教育目的は良妻賢母主義教育であり、家庭内に入る女性達の理想像が反映されている。授業科目は、音楽、多方面の知識、フランス語、歴史、図画、書き方、地理、ドイツ語、英文法、裁縫、地球儀、天球儀の利用、ラテン語、ダンス、などであった。家政学に関する教科目は、裁縫程度であるが、中産階級の家では、学校で教えられなくとも、家庭内で教育可能であると考えられたからである¹⁷⁴⁾。先述した教科目における教授法は、その教科目の有している質によって異なる。理論的な教育が主体となるもの、実践的教育が主体となるものとに大別されよう。当時のイギリスでは、講和法・教科書法・問答式のテキストによる機械的な暗記法などが主流であった。しかし、これらの教授法はジョハン・アモス・コメニウス¹⁷⁵⁾やペスタロッシーなどの直観教授法によって克服されようとしていた¹⁷⁶⁾。てつが、日本の教員養成学校でどのような教授法をとったかは、本論の主題ではないので特記しないが、彼女の後の教育観や教育実践の中で見出すことができる。

ナイチンゲールが“なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないのか？”と指摘したのは1846年（弘化3年）のことであった。教育者を教育すること、これは男女を問わない大きな課題であった。ナイチンゲールが実際、体験したドイツのカイゼルスウェルト学園でも、看護と教師の教育が同時に行われていた。シャトルワースが教育実験であると考えた“見習い制度”による教員養成は大きな実績を上げた。マシュー・アーノルド¹⁷⁷⁾は、彼の教育方式を「イギリス公教育の腱である」¹⁷⁸⁾と賞賛した。“見習い制度”による教員養成はイギリスの女子教育及びナイチンゲールが実施した看護教育にも継承され、そして、わが国の教員養成及び看護教育にも継承された。

3. 安井てつーナイチンゲールから受けた影響

てつは、その生涯からも確認できるように1897年（明治30年）から1900年（明治33年）までの3年間、英国に留学していた。帰国前の1899年（明治32年）3月にてつは、梅子と一緒にナイチンゲールを訪問している。

てつの生涯史にはナイチンゲールとの面会の記述は見つからない。しかし、『若き日のあと 安井てつ書簡集』には、彼女が英国留学時代に日本の友人や家族に宛てた手紙が資料として挿入されている。彼女の手紙には、「先日ミス・ナイチンゲールに御目にかかり候、実にきれいな老婦人にて老病の上にすわり居られ候、津田氏より詳しき御話あらん」と、ナイチンゲールと面会した事実を記載している。ナイチンゲールと面会したときの淡々と述べられ、その記述には、梅子ほどには感動が伝わらない。したがって、てつが、直接、ナイチンゲールから影響を受けたとは考えられない。しかし、ナイチンゲールの女子教育思想が看護教育に結びつき、ナイチンゲールの看護教育実践が、教育を施せば女性にも社会的有用性があるとの社会的評価に結びつき、その実践的モデルが英国の女子教育に影響を与えたとすれば、イギリスの女子教育思想から影響を受けたてつは、つまりは、ナイチンゲールからの影響を受けたとも言えるであろう。

1898年（明治31年）11月30日付の姉上に宛てた手紙には、「津田さんは西洋人の中に出してもどうも一風かはり英国人ニハ向かずと候、」¹⁷⁹⁾と日本人顔をした梅子の西洋風の考え方に違和感を覚える一方で、1900年（明治33年）2月4日付で、華族女学校附属幼稚園にあてた手紙には「日本の女子は実ニ赤児の如く、男子の女子に対する考えの低き事、実におどろくべき候、津田氏が変な考をもたるも当然にて、私でも十余年此地ニ住居、且世の中の酸も甘味も経験せざりし前ならば、且氏と同様の西洋風の考のかたまりしならん、幸にして夫程極端に至らず」¹⁸⁰⁾と述べ、英国に駐在する日本の妻たちのことを批判している。その上で、てつは、梅子が日本人的ではないがしかし、長年、外国の文化に触れて生活すれば、西洋人の考えに染まっていくことは必定であると梅子を理解する言葉をあらわしている。帰国後、てつは、梅子同様、女子教育に専心した。イギリスにおける女子教育のパイオニアであるビールが競争と試験を重視せず、ベストを尽くすことを好み、女性に知性

はいらぬとする偏見に対しては敢然と戦いを挑んだ態度は、ナイチンゲールの主義主張と一致している点である。

かつてオーギュスト・コント¹⁸¹⁾は「女性は知的作業には極めて不適格」¹⁸²⁾との意見を述べ、それは知性の内在的な弱さのせいであると説明を加えている。コントは、女性は知性の内在的弱さの為に知的作業にはふさわしくないと結論づけたが、ナイチンゲールは、理想的な看護婦は理想的な女性であると述べ、理想的な女性は知性(intellect)、倫理的行動(moral activity)、情熱(passion)を有している女性であると述べている。ナイチンゲールは女性に必要な徳性として知性を真っ先に掲げているのである。さらに、ナイチンゲールは、コントが述べたとされる言葉を自身の著作に引用し「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」¹⁸³⁾と述べた。ナイチンゲールが見聞した社会の現象が、ナイチンゲールの心に問いを抱かせ、彼女の知性が問題解決の方向に導いたのである。つまり、ビールとナイチンゲールは共に、女性には知性はいらぬという考え方に反論し、女性が有している知性を社会に還元すべきであるという女子教育思想を有していたということである。てつが師事したヒューズがビールの影響を受けているとしたら、てつも又、間接的にはナイチンゲールの女子教育思想の影響を受けたことになる。

1900年(明治33年)3月2日付のてつの手紙には、「独身者が何故社会のじゃまものなるか分り不申、少しハ独身ニてとほす人もありて女子の為ニ働くも国の為、皆結婚して祖身の快樂のみをよるこび、一般女子の為ニ盡す人なくてハ、わが国女子の位置ハとても進むものに無之と存じ候、私従兄なども非常に東西女子の知力の点に異なるをかんじ居る様子当然の事に候、併日本の女子ハ常に男子にのみ支配せられ居り候故、とても十分に祖位置を高める事出来不申と存じ候、これわが国風にて私もこのひっこみ思案がどうもぬけ不申、唯わが国の有様を考へ如何に西洋の人々がわが東洋人を見下し居るかを考ふれば、独わが那にもならず、東洋一般の女子の為に血涙をながし候、日本の女子ハ東洋の女子を助くる位の氣象ありて漸くわが邦の女子に盡す事を得る位に候、何も今より生涯独身にて暮すとか結婚するとか決心するに不及、たとへ、結婚するからとて、出来るだけハ

己れの知徳をすすめ、出来るだけの事業をするがよし、結婚せねばとて耻(はじ)にあらず、わが天命を盡すがこの上なき名誉に候、」¹⁸⁴⁾と述べ、女性達自身が自身の知徳を高め、天命に従って自身の生きる道を貫き通すことを進めている。

ナイチンゲールは『看護覚え書』で現代に置ける2つのたわごと(Jargon)の一つに“女性の権利”を、二つめには伝統的な良妻賢母主義を主張する者が存在することについて言及した。一方が、すべて男性がすることは医療やそのほかの専門職業も含めて、女性にもさせよと言うものであり、その理由たるや、単に男性がしているからというだけのことである¹⁸⁵⁾。そして、他方では、女性には男性のする仕事は一切させないようにというものであり、その理由たるや、彼女達は女性ではないか、女性には女性としての務めの意識を呼び覚まさなければならない。“これは女性の仕事”であり、“あれは男性の仕事”であって、“世の中には女性がしてはならない仕事があるのだ”という事なのだ¹⁸⁶⁾。ナイチンゲールはこうした主張のいずれもが何の根拠もないものであり、女性はいずれのどちらの声にも耳をかすことなく、自分の仕事がどのようなものであれ、自分の信念にしたがって、選んだ職業を遂行する事に最善を尽くすべきであると述べた。

てつ自身の意識・無意識に関わらず、天命に従って自身の生きる道を貫き通すという考えはナイチンゲールの考えと類似であり、当時としては進歩的な考えである。後年の評価として「先生は明治33年、西暦1900年、19世紀の最後の年において、昭和20年代の今日の日本に尚進歩的といひ得る女性観をもち、もっとも真実な女性解放運動の実践者であった。」¹⁸⁷⁾との記述を見出すとき、てつは、ナイチンゲール同様、実践的な女性解放運動家として位置づけられるであろう。

■ おわりに

本論では、ナイチンゲールに面会したとされる津田梅子・安井てつの生涯を検証しつつ、彼女らがナイチンゲールから受けた影響について検討した。まず、ナイチンゲールと面会したかどうかという事実関係について、ナイチンゲールとの面会の事実を、彼女たちの日記や手紙から確認することはできた。それらの記述から梅子がナイチンゲールに強い影響を受けて、ナイチンゲール自身

が女性として結婚するという事だけではない、新しい女性の生き方を見つけ出した様に、梅子も自己の人生において理想の追及をする道を自身で選択し、真に自立した女性を求めて女子教育を開始した。てつは、さりげない記載の仕方ではナイチンゲールとの面会の事実を述べているが、梅子同様、結婚するという事だけではない、新しい女性の生き方を見つけ出し、わが国における女子教育におけるパイオニアとなって活躍した。その根本思想はイギリスで受けた教育からの影響が大きく、ナイチンゲール同様、日本における実践的な女性解放主義者であった。

以上から、梅子・てつ両名は日本の女子教育の先進的なパイオニアとしてその地位向上に努めた。彼女たちは石黒忠恵・佐伯理一郎同様それぞれの生涯で、ある一地点にナイチンゲールという言葉を見出す者、生涯に渡ってナイチンゲールからの影響を受けたと考えられる者とそれぞれではあったが、基本的にはナイチンゲールが求めたように己が感じる意思のままに、自己の理想を貫きとおした人物たちであった。ナイチンゲールの社会改革以降、理想的女性像も変化させたといわれるほどに、ナイチンゲールの視点の向こうには絶えず女性たちが存在した。ナイチンゲールの想いは、意志決定的な人格としての“女性の権利”に関する問題でもあり、女性が知性を有することによって行動としても倫理的に変容すると考えた。

わが国の女子教育政策が後退する中で“修身教科書”では、ナイチンゲールを理想的人物像として取り扱い、クリミア戦争に看護婦として従軍したことや献身的で、慈悲深い女性としての側面の

みが強調された。それは、わが国の軍国主義的な学校教育政策、すなわち、“学校令”の忠心愛国の理念実現に効果的な人物であると考えられたからであろう。列強諸外国との戦いが繰り広げられた時代にあつては、女であっても国家に命を捧げられる勇敢な女性としてのモデルは必要であつたろうし、事実、ナイチンゲールは熱烈な愛国主義者であった。しかし、イギリスにおける上流社会の伝統的な性役割を考えた場合、クリミア戦争に看護婦として従軍すること事態、普通ではなかったのであるから、ナイチンゲールがそのことを実践したということ事態、男性にもできないほどの勇敢さなのである。

基本的人権における国民の権利と義務、あるいは自由と公共の福祉といった表裏一体の概念は、人としていかにあるべきかという側面を持ち、道徳的な問題と法的な側面として今日でも重要な課題である。これは家庭のみに止まらず、社会において有用であるとはいかなることかの問題でもあり、今日に至ってもなお、解決された問題ではない。ナイチンゲールが、明確な目的は実現していかなければならないが、その目的を実現していくための道は、大いに発見していかなければならないと述べたように、その明確な目的実現のための方法発見は探究である。その探究不足がわが国の看護界が諸外国から大きく遅れを取った原因であると筆者は考えている。そして、最後に付け加えるならば、ナイチンゲールに面会した人物の中に看護教育に参画した女性たちが存在しなかったことに、一抹の不満を覚えるのは筆者だけであろうか。

註釈

- 1) 佐々木秀美著；歴史に見るわが国の看護教育－その光と影，青山社，2005年。
- 2) 佐々木秀美著；ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり－教育の創造と伝承－，看護学統合研究，Vol.13，No.1，pp29-48，2013年。
- 3) 杉田暉道他著；看護史，p115，医学書院，1987年。
- 4) 石黒忠恵（ただのり）（1845-1941）；明治時代の医師，日本陸軍軍医。草創期の軍医制度を確立した。爵位は子爵。学位は医学博士。
- 5) 佐伯理一郎（1862-1953）；明治－昭和時代の医師，教育者。横須賀海軍病院にはいり，アメリカに留学し1891年，（明治24年）帰国。同志社病院長，京都看病婦学校長となり，看護師・助産師教育につくした。
- 6) 津田梅子（1864-1929）；明治期から大正期の女子教育家。津田義塾大学の創設者。1871年（明治4年），開拓史派遣の5人の少女の一人として岩倉使節団と共にアメリカに渡った。他メンバーは吉益亮子，上田貞子，山川捨末，永井繁子。

- 7) 安井てつ (1870-1945)；明治・大正・昭和期の女子教育者。1896年（明治29年）家政・教育学研究を目的とする文部省留学生としてイギリスに留学。教育学と教育史を学び、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学で教育学と心理学などを修めた。女子高等師範学校教授、舎監を兼任。1917年（大正6年）東京女子大学の学監となる。
- 8) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと面会できた4人の日本人ーその1 石黒忠恵と佐伯理一郎ー，看護学統合研究 Vol.14, No.1, pp15-46, 2013.
- 9) フローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale 1820-1910)；イギリスの看護教育及び社会改革家。イタリアで生まれ。ドイツのカイゼルスウェルト学園で看護を学び、その後、婦人病院の看護監督官になるが、1854年（安政元年）、クリミア戦争勃発後に看護婦として従軍し、クリミアの天使と呼ばれた。1860年（万延元年）、聖トマス看護婦学校を創立、卒業生を以ってその優秀性を示し、ナイチンゲール方式と呼ばれる看護教育方式が世界中に広まった。その思想の根本には人々の健康と公衆衛生の普及という概念があり、女性をしてその役割が果たせるように企画したものである。女性の解放及び自立という意味でもナイチンゲールの果たした役割は大きく、実践的女性解放主義者とも呼ばれる。
- 10) Florence Nightingale(1858); Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻，女性による陸軍病院の看護，p39, 現代社，1985年.)
- 11) 佐々木秀美著；国定教科書におけるナイチンゲールの取り扱いに関する若干の考察，総合看護，Vol.36 No.3, pp67-74, 2001年.
- 12) 黒田清隆 (1840-1900)；薩摩藩士。1870年（明治3年）には北海道開拓使次官，1874年（明治7年）には北海道開拓長官になった。1888年（明治21年）内閣を組閣したが、大隈重信外相の条約改正案にたいし、世論の反対を受けて辞職した。
- 13) 吉川利一著；津田梅子，pp23-25, 中央公論社，1990年.
- 14) 5人の少女；吉益亮（14歳），上田貞（14歳），山川捨松（11歳），永井繁子（8歳），津田梅子（6歳）の5名.
- 15) 岩倉使節団；明治維新期の1871年（明治4年）12月23日から1873年（明治6年）9月13日まで，岩倉具視（1825-1883 日本の公家・政治家）を正使とし，日本からアメリカ合衆国，ヨーロッパ諸国に派遣した大使節団である。
- 16) 学制；1872年（明治5年）に交付された我が国初の学校教育法。
- 17) デイビット・モルレー (David Murray 1830-1905)；1873年（明治6年）文部省に招かれ来日したアメリカ人。わが国文教政策の最高顧問。田中不二麻呂文部大臣に協力して“学制”の実施を指導した。
- 18) 片山清一著；近代日本の女子教育，p15, 建帛社，1881年.
- 19) 田中不二麻呂 (1846-1909)；学制の実施期から教育令実施当時まで，文部省内にあって実質上，教育政策を指導・推進した中心的人物。
- 20) 唐沢富太郎著；教師の歴史，p107, 創文社，1955年.
- 21) 唐沢富太郎著；前掲書20).
- 22) 梅根悟監修；世界教育史体系，教員養成，講談社，1974年.
- 23) F・ゲッセル著，村田文夫訳；子供育草，玉山堂，1874年.
- 24) ハスケル著，永峰秀樹訳；家政要旨，1874年.
- 25) クレンケ・ハルトマン著，近藤鎮三訳；母親の心得，1875年.
- 26) マルチンダル著，小林義直訳；四民須知養生浅説，蘆灣漁舎柿，1875年.
- 27) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, Scutari Press, 1992.
- 28) Florence Nightingale (1860); 前掲書27), p3.
- 29) 村上信彦著；明治女性史，講談社，1876年.
- 30) 橋本綱常 (1845-1909)；1872年（明治5年）ドイツに留学。1877年（明治10年）帰国。陸軍軍医監，

- 東京大学医学部教授となった。1884年（明治17年）ヨーロッパに視察に行った際、赤十字事業を調査、博愛社病院の設立に尽力した。1886年（明治19年）初代院長となり、日本赤十字社病院の看護婦養成事業を推進した。
- 31) 吉川利一著；前掲書13), p128.
 - 32) Elizabeth M. Jamieson, Mary F. Sewall, Eleanor B. Suhrie; Trend in Nursing History, W. B. Saunders Company, 1966.
 - 33) Elizabeth M. Jamieson, Mary F. Sewall, Eleanor B. Suhrie; 前掲書32), pp419-420.
 - 34) 吉川利一著；前掲書13).
 - 35) 古木宣志子著；津田梅子，清水書院，1992年.
 - 36) 亀田帛子著；津田梅子　ひとりの名教師の軌跡，双文社出版，2007年.
 - 37) 津田仙（1837-1908）；日本の農学者，キリスト教者，学農社創立者，同志社大学・青山学院大学・筑波大学付属盲学校の創立に関わる，同志社大の創始者新島襄に人間の自由と平等を説いた，東京帝国大学教授の中村正直とともに“キリスト教界の三傑”とうたわれた，明六社会員.
 - 38) チャールズ・ランマン（Charles Lanman 1819-1895）；日本公使館の書記官で画家，米国下院の司書なども務める傍ら，冒険家，著作家として知られる，日本には岩倉使節にも随行し，使節と同時に留学した津田梅子や山川捨松らの女子留学生の世話役としても知られている，ランマンが，岩倉使節に随行する際に出版した『The Japanese in America』は日本と岩倉使節を紹介した本の一部としても刊行されたものである.
 - 39) 村田鈴子著；アメリカ女子高等教育史，p13，春風社，2001年.
 - 40) ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-1790）；アメリカ合衆国の政治家・外交官・著述家・物理学者・気象学者，印刷業で成功を収めた後，政界に進出しアメリカ独立に多大な貢献をした，1751年（宝暦元年），フィラデルフィア・アカデミー（後のペンシルバニア大学）を創設，1777年（安永6年），アメリカ独立宣言の起草委員の一人となり，独立戦争中はパリの社交界を中心に活動し，欧州諸国との外交交渉に奔走，独立戦争へのフランスの協力・参戦と，他の諸国の中立を成功させた.
 - 41) 村田鈴子著；前掲書39), p15.
 - 42) 村田鈴子著；前掲書39), p19.
 - 43) 村田鈴子著；前掲書39), p26.
 - 44) 大山捨松（1860-1919）；会津藩の家老山川家の娘，岩倉使節団とともにわが国最初的女子留学生，ニューヘブンの宣教師レオナルド・ベーコン夫妻の家庭に入って教育を受けた，卒業後、ニューヘブンの市民病院で看護学の勉強をした，帰国後，陸軍大臣大山巖と結婚した，日本赤十字社に働きかけ日本篤志婦人会を発足させた，東京帝国大学の総長になった山川健次郎は実兄である.
 - 45) 永井繁子（1862-1928）；教育者，永井繁子は佐渡奉行所属役，益田孝義の四女として江戸本郷に生まれた，幕府軍医永井久太郎の養女，新政府の第一回海外女子留学生として渡米，ヴァッサー大学音楽学校に入学，10年間をアメリカで過ごす，1886年（明治19年）東京女子高等師範学校兼東京音楽学校教員になる，海軍大将瓜生外吉と結婚した.
 - 46) 伊藤博文（1841-1909）；山口県生まれ，明治期を代表する政治家，明治維新後は新政府の要職を歴任し，1885年（明治18年）初代内閣総理大臣となった，1889年（明治22年）に発布された大日本帝国憲法制定の中心人物.
 - 47) 下田歌子（1854-1936）；美濃国（岐阜県）岩村藩士平尾家の長女として生まれた，1872年（明治5年），19歳で宮中の女官に登用され，昭憲皇太后から「歌子」の名を賜った，1879年（明治12年）病気のため宮中奉仕を拝辞して平尾家に戻り，下田猛雄と結婚した，1881年（明治14年）桃夭（とうよう）女塾を創設して女子教育の第一歩を踏み出した，1884年（明治17年）宮内省の辞令をうけ，華族女学校の創設にあたった，1893年（明治26年）欧米視察，宮内省からイギリス皇室の皇女御教養事情の調査と，各国の女子教育を視察した，1898年（明治31年），帝国婦人協会を設立，教育部門として実践女学校と女子工芸学校の2つを開校させた.

- 48) 大山巖 (1842-1914)；鹿児島県出身，西郷隆盛の従兄弟．明治維新政府で陸軍卿，陸軍大臣．近代日本陸軍の建設に貢献した．妻が出産後に産褥熱によって死亡したため，残された子の育児と教育のために捨松と結婚した．
- 49) 古木宣志子著；前掲書35)，p102．
- 50) アリス・ベーコン (Alice Mabel Bacon 1847-1918)；山川捨松がホームステイしたレオナルド・ベーコン牧師の末娘．
- 51) 高木兼寛 (1849-1920)；宮崎県生まれ，1868年 (明治元年)，東北征討軍に軍医として加わった後，鹿児島藩立開成学校に入学してイギリス人医師，ウィリスに学んだ．1872年 (明治5年) より海軍に出士し，1875年 (明治8年) からイギリス，聖トマス病院に留学する．帰国してからは東京海軍病院院長を務めながら，1881年 (明治14年) に成医会を結成，成医会講習所を設立 (現在の東京慈恵会医科大学の前身)，1882年 (明治15年) 海軍省医務局長となり，脚気病対策に取り組んだ．1888年 (明治21年) 我が国最初の医学博士となった．
- 52) 古木宣志子著；前掲書35)，p108．
- 53) モリス・メアリー (Mrs. Morris Mary)；ペンシルバニア鉄道の経営者で大富豪モリス・ウイスター (Morris Wistar) の妻．福音週報第7号，明治23年4月25日付けにモリス氏夫妻に関する書簡が掲載されている．
- 54) 吉川利一著；前掲書13)，p161．
- 55) ヨハン・ヘンリック・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827)；哲学者として，教育思想家としてまた，貧民教育の実践者としても有名である．
- 56) エドワード・A・シェルドン (Edward Austin Sheldon 1823-1897)；アメリカ合衆国の教育者．ニューヨーク州オスウィーゴー師範学校 (1866年 (慶応2年) 市立から州立に移管) 長として，1861年 (文久元年) から彼の死の1897年 (明治30年) まで約40年間，教育界に在職した．同校を中心として展開されたペスタロッチー教育運動であるオスウィーゴー運動の主唱者．アメリカにペスタロッチー主義教育の実物教授を導入，普及に尽力し，公立小学校の求める近代教授法を修得した教員の養成に貢献した．
- 57) 長尾十三二著；西洋教育史，p237，東京大学出版会，1994年．
- 58) トーマス・モーガン (Thomas Hunt Morgan 1866-1945)；アメリカの生物学者・遺伝学者．ケンタッキー州立大学とジョンズ・ホプキンス大学で動物学を学び，コロンビア大学とカリフォルニア工科大学で，実験動物学教授を務める．プリンマー大学の学部長でメアリー・ギャレットとともにジョンズ・ホプキンス大学医学部に女子の入学を認めさせた人で，アメリカの女子高等教育の歴史に著しい功績を残した人物．このころ，進化論などの影響で生物学が脚光を浴びていた，モーガン教授は1933年 (昭和8年) ノーベル賞を受賞した．
- 59) 古木宣志子著；前掲書35)，pp122-123．
- 60) ヘレン・アダムス・ケラー (Helen Adams Keller 1880-1968)；アメリカ合衆国の教育家・社会福祉事業家である．自らも重い障害を背負いながらも，世界各地を歴訪し，身体障害者の教育・福祉に尽くした．1937年 (昭和12年) と1948年 (昭和23年) に日本を訪問している．
- 61) 古木宣志子著；前掲書35)，p143．
- 62) アナ・ハーツマン (1860-1957)；父親は医学を修め，敬虔なクエーカー教徒である．梅子の父親の仙がアメリカから持ち帰った医学書の邦訳で有名な人物である．アナは梅子の父親と1893年 (明治26年) に来日している．梅子はプリンマー大学で知り合い，以後，親交を深めていた．
- 63) フランクリン・デラノ・ルーズベルト (Franklin Delano Roosevelt 1882-1945)；アメリカ合衆国の政治家で民主党出身の第32代アメリカ大統領 (1933-1945)．ルーズベルトはアメリカ政治史上で唯一四選された．初代のワシントン大統領が三選を固辞した事から，大統領は二選までというのが慣例だったが，戦時・有事を理由に1940年 (昭和15年) と1944年 (昭和19年) の大統領選に立候補し当選した．身体障害を有していた唯一の大統領としても知られる．任期中に世界恐慌と第二次世界大戦を経験，20世紀前半の国際政治における中心人物の1人だった．ルーズベルトのニューディー

- ル政策はアメリカ合衆国経済を世界恐慌のどん底から回復させたと評価されている。
- 64) 梅根悟監修；世界教育史体系36, 女子教育史, p226, 講談社, 1974年.
 - 65) 山川健次郎(1854-1931)；明治・大正教育界の巨人. 物理学者, 教育者. 大山捨松の実兄. 1870年(明治3年)北海道開拓使の推挙でロシアに留学. 1871年(明治4年)開拓使留学生として渡米. エール大学に学ぶ. 1879年(明治12年)東京帝国大学教授, 1888年(明治21年)博士号授与者としてわが国最初の理学博士となる. 1901年(明治34年)東京帝国大学総長になった.
 - 66) 久野明子著；鹿鳴館の貴婦人大山捨松, p181, 中公文庫, 1997年.
 - 67) 久野明子著；前掲書66), p181.
 - 68) 森有礼(1847-1889)；薩摩藩士. 上野景範に英学を学び, イギリス・アメリカに留学. 第一次伊藤内閣の時に初代文部大臣となり, 学校制度の改正を行う. また私財により商法講習所(現在の一橋大学)を設立した.
 - 69) 日本近代教育史事典編集委員会編；日本近代教育史事典, p423, 平凡社, 1971年.
 - 70) 山県有朋(1838-1922)；明治・大正期の軍人・政治家・元老の筆頭格. 長州萩藩の武士階級の出身. 1889年(明治22年)から約2年間に渡って第一次山県内閣を組閣し, 中央集権的警察制度の実現に尽力し, 1898年(明治31年)元帥となり, 同年再び内閣を組閣した.
 - 71) 国民新聞, 1897年(明治30年)2月17日付け.
 - 72) 文部省編；学制百年史, p154, 帝国地方行政会, 1972年.
 - 73) 新村出編；広辞苑, 岩波書店, 1998年.
 - 74) 官報, 1900年(明治33年)3月10日付け.
 - 75) 平塚らいてう(1886-1971)；日本の思想家. 評論家・作家・フェミニスト. 戦前と戦後を通して女性解放運動・婦人運動の指導者.
 - 76) 今井清一編集；近代日本思想体系33, 大正思想集, p49, 筑摩書房, 1975年.
 - 77) 『ナイチンゲール伝』；梅子が渡英する前に出版されたナイチンゲール関係の単行本は, 1890年(明治23年)に出版されたシー・カルクス著, 北山初太郎訳『フロレンス・ナイチンゲール』であり, 信仰心の篤い, 慈悲心に富んだ女性として紹介された. 次に出版されたのは1901年(明治34年), 女子の友記者勁林園主人編『ナイチンゲール』である. 現代社出版の『ナイチンゲール著作集第二巻』p508より.
 - 78) 吉川利一著；前掲書13), p73.
 - 79) Florence Nightingale(1900); Letter addressed at and 'To all our nurses', (湯模ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻, 看護婦と見習い生への書簡, p430, 現代社, 1985年.)
 - 80) Florence Nightingale (1900)；前掲書79), pp430-431.
 - 81) Florence Nightingale (1900)；前掲書79), p454.
 - 82) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited; Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters, p30, VIRACO PRESS, 1989.
 - 83) Mary Poovey Edited; Florence Nightingale, Cassandra/Suggestions for Thought, p205, Pickering & Chatto Limited, 1991年. 「およそ人は誰でも寄る辺なく野に人生の辛酸をなめながら一人さまようことがあります・・・ただ一人目覚めて未熟なままで悪と立ち向かい, 沈黙と孤独のうちにさまよい歩かねばならない人—こういう人はあまりにも早く目覚めすぎ, 立ち上がるのが早すぎ」と書いている.
 - 84) Mary Poovey Edited; 前掲書83), p201.
 - 85) 佐々木秀美著；ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス, 看護学統合研究, Vol.12, No.1, pp24-41, 2011年.
 - 86) 佐々木秀美著；ナイチンゲールとミルとの論争—ヒューの論文を手がかりに—, 総合看護, Vol.37, No.3, pp53-64, 2002年.
 - 87) Mary Poovey Edited; 前掲書83), p139.
 - 88) Mary Poovey Edited; 前掲書83), p211.

- 89) Mary Poovey Edited; 前掲書83), p211.
- 90) Mary Poovey Edited; 前掲書83), p216.
- 91) チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin 1809-1882); エジンバラ大学で医学を学ぶがこれを嫌い、ケンブリッジ大学で神学を学ぶ。この時期に昆虫学と植物学に触れ、パタゴニア探検 (1831-1836) の職を確保し、5年に渡る探検中に諸国の動植物や地質の詳細を得て、出版した。
- 92) ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron 1788-1824); 英国の詩人。10歳までは貧しい環境に育つが、大叔父の称号を相続、ケンブリッジ大学に学んだ。放蕩な生活を送った後、『ハロルドの遍歴』で社交界の英雄になり、バイロンの概念をヨーロッパ中に広めた。
- 93) ウォルター・スコット (Sir Walter Scott 1771-1832); 英国の詩人、小説家。エジンバラで学び弁護士となる。『湖上のびじん』などのロマンス詩がある。
- 94) George Macaulay Trevelyan, English Social History, (松浦高嶺他の翻訳本訳『イギリス社会史2, p451, 美鈴書房, 1988年。
- 95) 青山なを著; 安井てつと東京女子大学, 慶應通信, 1978年。
- 96) 青山なを著; 安井てつ伝, 大空社, 1990年。
- 97) 青山なお編集; 若き日のあと—安井てつ書簡集, 安井先生没後二十年記念出版刊行会, 東京女子大学内, 1965年。
- 98) 樋口一葉 (1872-1896); 日本の小説家。東京生れ。本名は夏子, 戸籍名は奈津。中島歌子に歌・古典を学び、半井桃水に小説を学んだ。生活に苦しみながら『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』といった秀作を発表、文壇から絶賛されるも25歳で肺結核により死去した。
- 99) エリザベス・ヒューズ (Elizabeth Phillips Hughes 1851-1925); イギリスの教育者。1884年 (明治17年) から1899年 (明治32年) までケンブリッジ大学の初代女子師範部長 (The first Principal of the Cambridge Training College for Women) を務めた。安井てつの招きによって1901年 (明治34年) 来日。『英国人の立場より見たる女子教育』の講演を行い、この講演のなかで当時最新の体操法としてスウェーデン体操を推奨し、日本に広まるきっかけを作った。幼少期はほとんど教育を受けていなかったが、地元の私学校に通った後は進学を続け、チェルトナム女子大学の教師となる。さらにケンブリッジ大学のニューナム・カレッジに進んだ。
- 100) 青山なお編集; 前掲書97), p112.
- 101) 海老名弾正 (1856-1937); 伝道師, 神学者, 思想家。熊本洋学校に学び、ジェーンズ (前掲8脚注参照) から洗礼を受ける。同志社神学校卒業後は群馬県安中教会牧師となり、以後、前橋教会、本郷教会、熊本英学校、熊本女学校、日本基督教伝道会社、神戸教会を経てふたたび本郷教会牧師となり、晩年には第8代同志社総長をつとめた。彼の神学は進歩的・自由神学的〔新神学〕の強い影響を受け、信仰理解をめぐる、正統主義信仰の植村正久福音主義論争を戦わせ、教会内外の注目を集めた。彼の思想の神道的・武士道的・国粋主義的性格は、日露戦争に対する積極的肯定にまでつながっている。
- 102) 新渡戸稲造 (1862-1933); 農学者, 教育者。岩手県盛岡市生まれ。13歳で東京英語学校に学んだ。その後、札幌農学校に内村鑑三らと共に入学。その後、東京大学へ進学。進学後、私費でアメリカに留学ジョンズ・ホプキンス大学に入学。この頃までに稲造は伝統的なキリスト教信仰に懐疑的になっており、クエーカー教徒たちとの親交を通してメリー・エルキントンと結婚。その後、札幌農学校助教授に任命された。ジョンズ・ホプキンス大学を中途退学して官費でドイツへ留学。ボン大学などで聴講した後、ハレ大学より博士号を得て帰国し、教授として札幌農学校に赴任する。この間、新渡戸の最初の著作『日米通交史』がジョンズ・ホプキンス大学から出版され、同校より名誉学士号を得た。だが、札幌時代に夫婦とも体調を崩し、カリフォルニアで転地療養中に『武士道』を英文で書きあげた。1900年 (明治33年) に『武士道』の初版が刊行されると、各国語に訳されベストセラーとなった。その後、東京帝国大学教授、拓殖大学学監、東京女子大学学長などを歴任した。
- 103) 後藤新平 (1857-1929); 医師・政治家。1882年 (明治15年) 板垣退助が暴漢に襲われたとき治療を

- したことで有名。
- 104) 滝内大三著；イングランド女子教育研究，p382，法律文化社，1994年。
 - 105) B・サイモン著，成田克矢訳；イギリス教育史，p17，亜紀書房，1977年。
 - 106) T・H・グリーン著，松井一麻呂他訳；イギリス教育制度論，お茶の水書房，1983年。
 - 107) スチーブン・ファンフリーズ著，山田潤他訳；大英帝国の子供達，柘植書房，1990年。
 - 108) 三好信治著；イギリス公教育の歴史的構造，亜紀書房，1968年。
 - 109) チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens 1812-1870）；イギリスの小説家。法律事務所で下働き後に民法博士会館の議事速記者になり，22歳でロンドンの新聞記者になる。彼は小説中に多彩な人物を登場させ，その当時の社会悪を激しく批判した。小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャング婦人という卑しい女性を登場させ，病院看護の実態を批判した。
 - 110) ディケンズ著，中野好夫訳；ディビット・コパフィールド，新潮文庫，1991年。
 - 111) シャーロット・ブロンテ（Charlotte Bronte 1816-1855）；イギリスの女流作家。1835年，母校のロウ・ヘッドの教師になったが，辞めて家庭教師になる。しかし，これも直に辞めてしまう。エミリー（1818-1848），アン（1820-1849）の三姉妹で自分達の学校を作るつもりであったがこれも失敗した。代表作『ジェーン・エア』
 - 112) C・ブロンテ著，大久保康夫訳；ジェーン・エア上，新潮文庫，1988年。
 - 113) トマス・ヒューズ（Thomas Hughes 1822-1896）；ラグビー校におけるアーノルドの弟子（1834-1842）。フレデリック・D・モリスらと共に労働者大学の設立に当たり，後にその学長になった。
 - 114) Thomas Hughes, Tom Browns Schooldays（前川俊一訳：トム・ブラウンの学校生活，岩波書店，1956年。）
 - 115) ハリエット・マーティノウ（Harriet Martineau 1802-1876）；英国の女流小説家，経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき，数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より。
 - 116) ドロシ・ビール（Dorothea Beale 1831-1906）；イギリス女子教育の先駆者。チェルトナム女子大学の校長を務め（1858-1906），1885年にはチェルトナムにイギリス初の女性教師養成学校としてセント・ヒルダス・カレッジを創設。1893年（明治26年）に女性教師向けにオックスフォード大学に作られたセント・ヒルダス・ホールの後援者になった。
 - 117) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと看護教育－その教育目的へのアプローチ，看護教育，Vol.36, No.1, 1995年。
 - 118) 佐々木秀美著；ナイチンゲール教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ，知性はその問いに答を要求する，看護学統合研究，Vol.12, No.1, pp42-67, 2010年。
 - 119) エドワード・ショーター著，木村定訳；精神医学の歴史，青土社，1999年。
 - 120) エドワード・ショーター著，木村定訳；前掲書119），pp24-25。
 - 121) 滝内大三著；前掲書104），p176。
 - 122) 滝内大三著；前掲書104），p179。
 - 123) トマス・ア・ベケット（Thomas a Becket 1118-1170）；ロンドン生まれの聖人，殉教者。裕福なノルマン商人の息子。ロンドン，パリで学業を修め，ボローニャ，オーセールの両大学で教会法を専攻，1155年（久寿2年），大法院司教に任ぜられる。カンタベリー大司教に任ぜられた後，辞職し，国王に仕えるようになるが，教会と国家との関係を定めたクラレンド法成立に関わった後，国王との関係に亀裂が生じ，国外逃亡。ヘンリー王との和解後に帰国するが，聖職者を国王に従属させようとする国王との間の摩擦は埋められず，王直属の騎士に殺害された。
 - 124) エドワード6世（Edward VI 1537-1558）；ヘンリー8世と彼の3番目の後の子。王位継承後は伯父のサマーセット公が実権を握り，彼の死亡後はジョン・ダットリーに実権が移った。エドワードは敬虔なプロテスタントとなり，護民官のもとで，宗教改革が開いた。
 - 125) 滝内大三著；前掲書104），pp178-179。

- 126) Florence Nightingale (1863), Note on hospital (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第二巻, 病院覚え書, p241, 現代社, 1983年.)
- 127) Florence Nightingale (1863)；前掲書126), p241.
- 128) 滝内大三著；前掲書104), p202.
- 129) Florence Nightingale (1851), The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, p3-4, 現代社, 1983年.)
- 130) B・サイモン著；前掲書105).
- 131) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704)；イギリス経験論の代表的哲学者. 近代民主主義の代表的思想家の一人. オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ. ピューリタン革命, 王政復古, 名誉革命と激動していく時代に生活し, 人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって名誉革命の指導的理論家になった. 医師でもあり, ホイッグ党初代党首, シャフツベリー伯爵と親交を結び, 政治的にもその生涯を共にした.
- 132) John Lock, Some Thoughts Concerning Education (服部都知文訳；教育に関する考察, 岩波書店, 2000年.)
- 133) ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778)；フランス啓蒙期の天才思想家. 彼の活動はきわめて多面的で, その主権在民・自由平等, 愛国などの思想がアメリカ独立やフランス革命に理論的基礎を与えたのみでなく, 社会主義, 人格主義, 永久平和の理想, ヒューマニズム教育, ロマン主義など, 近代を形成する先駆者である. 人間の自然の善性を原理に教育は宝の詰め込みでない, ただ被教育者の自然的能力の開花を妨げるべきものの除去を目標とする「消極教育」を主張した. 知的早期教育の否定, 徳育と体育の重視, 実物教育, 教育の手段化に反対して, まず人間たれと説くこと, など教育学上画期的な見解を示し, カントにも大きな影響を与えた.
- 134) J・J・ルソー著, 永杉喜輔他訳；エミール, 玉川大学出版部, 1984年.
- 135) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893)；イギリスのギリシャ哲学者. ナイチンゲールの思想に共鳴して, 彼女の仕事を手伝い, 多くの助言を与えた. ナイチンゲールの生涯の友人である.
- 136) 柴田京子, 津田右子, 佐々木秀美共著；ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフの関わりをてがかりに, 総合看護, Vol.40, No.3, pp41-58, No.4, pp73-80, 2005年.
- 137) トマス・アーノルド (Thomas Arnold 1795-1842)；イギリスの教育学者. オックスフォード大学に学び, 1828年 (文政11年) にラグビー校の校長に就任した. 青少年の教育に携わりながら, 彼らに広い視野に立つ思想的可能性を開花させた. 彼の思想的影響を受けた青年神学者たちが, コールリッジの哲学や思想を吸収し, 新たな神学的枠組みを形成したといわれる. 『イングランドの宗教』p216より.
- 138) T・H・グリーン著, 松井一麻呂他訳；前掲書106), p7.
- 139) チャーチスト運動 (Chartist Movement)；ロンドン労働者協会のラベット (William Lovett) を中心に政治的運動を展開し, 人民自ら自己教育のための学校施設を建設するべきであると主張した運動. 彼らの主張は基本的に民衆教育とその制度的確立である. 『イギリス公教育の歴史的構造』より.
- 140) 三好信治著；前掲書108), p12.
- 141) カール・マルクス (Karl Marx 1813-1883)；国際的共産主義の祖. ボン大学とベルリン大学で法律を学んだ. 1848年 (嘉永元年) に共産党宣言を完成させ, その中で国家は抑圧の道具であり, 宗教や文化は資本家階級のイデオロギーだと攻撃した. 1849年 (嘉永2年) にロンドンに落ち着いてから経済学を研究し, 『資本論』を書いた.
- 142) K・マルクス著, 長谷部文雄訳；資本論, p321, 河出書房, 1970年.
- 143) アンドリュー・ベル；(Andrew Bell 1753-1832)；助教方式・モラトリアル方式. 学級を小グループに分け, 優秀児に担当させ, 担当グループの教授・管理を分担させる相互教授法. 多数を安価に

- 教える方法をランカスターと一緒に開発した。
- 144) ジョセフ・ランカスター (Joseph Lancaster 1778-1838)；助教方式・モラトリアル方式、学級を小グループに分け、優秀児に担当させ、担当グループの教授・管理を分担させる相互教授法、多数を安価に教える方法をベルと一緒に開発した。
- 145) ケイ・シャトルワース (Kay Shuttleworth 1804-1877)；医師でもあり、救貧法行政官であった。ナイチンゲールの友人であるチャドウィックは彼の友人でもある。
- 146) 三好信治著；前掲書108), p144.
- 147) 三好信治著；前掲書108), p154.
- 148) ペスタロッチー著、長田新訳；隠者の夕暮れ、岩波文庫、1987年。
- 149) トーマス・バビングトン・マッコリー (Thomas Babington Machaulay 1800-1859)；歴史家、ウィッグ系政治家、グラスゴウ大学総長。
- 150) 三好信治著；前掲書108), pp313-314.
- 151) フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モド・フェヌロン (Francois de Saligmac de La Mathe Fenelan 1651-1715)；フランスの聖職者作家。彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事、また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた。
- 152) フェヌロン著、志村鏡一訳；女子教育論、明治図書出版、1974年。
- 153) フェヌロン著、志村鏡一訳；前掲書152), p133.
- 154) フェヌロン著、志村鏡一訳；前掲書152), p9.
- 155) ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham 1748-1832)；イギリスの哲学者、法学者、社会改革家である。最も有名な功利主義者である。彼はあらゆる行為と立法の適切な目的は“最大多数の最大幸福である”と説いた。1792年（寛政4年）にフランス共和国名誉市民になり多数の著書を発刊して経済・政治を説いた。
- 156) J・R・ディンウィディ著、永井義雄訳；ベンサム、p181、日本経済新聞社、1993年。
- 157) ナイチンゲール氏 (William Edward Nightingale 1794-1874)；ナイチンゲールの父親、ケンブリッジ大学を卒業。国会議員を目指したが、落選。地方貴族としての役割を果たしながら、子供達の教育に専念した。
- 158) C・ブロンテ著、大久保康夫訳；ジェーン・エア上、p324、新潮文庫、1988年。
- 159) C・ブロンテ著、大久保康夫訳；前掲書158), p66.
- 160) トレヴェリアン著、松浦高嶺他訳；イギリス社会史、p402、みすず書房、1988年。
- 161) ザカリイ・コープ著、小池明子他訳；ナイチンゲールと医師達、pp214-215、日本看護婦協会出版会、1979年。
- 162) Mary Poovey Edited; 前掲書83), pp217-218.
- 163) 滝内大三著；前掲書104).
- 164) ジョン・フレデリック・デニソン・モーリス (John Frederick Denison Maurice 1805-1872)；神学者・作家。英国国教会司祭の社会改革者。ケンブリッジ大学に学び、学位を取らずに退学。一時期文筆活動をするが、イギリス国教会の聖職につき、リンカーンズ・イン法学院のチャプレンを務める。1841年（天保12年）からロンドン大学キングス・カレッジで文学教授、神学教授を歴任し、後にケンブリッジ大学で倫理学教授となる。トマス・ヒューズやチャールズ・キングスリーらと共にキリスト教社会主義運動を起こし、労働者カレッジを設立、初代校長となった。
- 165) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804)；ドイツの哲学者。ケーニヒスベルクに生まれる。同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ。後、1746年（延享3年）にケーニヒスベルク大学の私講師になり、1755年（宝暦5年）に同大学の論理学・形而上学の正教授となる。
- 166) フレデリック・フレーベル (Friedrich Frobel 1782-1852)；ドイツの教育家。幼稚園の創始者。イエーナ大学時代、ドイツロマン派の影響を強く受けると同時に、1805年（文化2年）、ペスタロッチーに会い、決定的な影響を受けた。内在的には超越的な神と自然と人間とを統一的にとらえる。彼の三つの教育の原理として自己活動の原理、労働の原理、社会の原理があり、個人の発達と人類の発

- 展とを相互媒介的に考えた。児童の作業や遊びは個人の発達の問題であることに止まらず、人類の発展に連なるものと評価される。
- 167) ヨハン・フレデリック・ヘルバルト (Johann Friedrich Herbert 1776-1841)；ドイツの哲学者。ケーニヒスベルグ、ゲッティンゲン大学の教授を歴任した。ヘルバルトによれば我々は経験から出発しなければならないが、その経験は何ら、認識を与えない。経験概念を修正し、その矛盾を取り除くことが哲学の仕事である。矛盾に満ちた経験概念を矛盾なき明瞭判明な概念にまで修正し、現象界に明確な基礎を与える「諸実在者の学」としての形而上学を構想した。この形而上学を応用した自然哲学と心理学、一方価値判断に関わる美学と倫理学とから、特に心理学と倫理学を基礎として体系的な教育学を組織した。
- 168) 滝内大三著；前掲書104), p255.
- 169) 滝内大三著；前掲書104), p27.
- 170) 滝内大三著；前掲書104), p253.
- 171) 滝内大三著；前掲書104), p253.
- 172) 滝内大三著；前掲書104), pp383-384.
- 173) 滝内大三著；前掲書104), pp378-379.
- 174) 滝内大三著；前掲書104), p371.
- 175) ヤン・アモス・コメニウス (Johann Amos Comenius 1592-1670)；モラビア生まれの教育思想家。キリスト教の神父。彼の主著は、ラテン語教育の手法を軸に教育学そのものの体系を考案した『大教授学』、『開かれた言語の扉』の他に、世界初の子どものための絵入り子ども百科事典『世界図会』である。『大教授学』の中で彼は「すべての人にすべての事柄を教授する」と述べ、教育の機会均等を初めて主張した。人類が共通の普遍的な知識を共有することによって世界平和が実現すると考えた。その方法は直感教授であり、その教育方法はヨーロッパに影響を与えた。また、コメニウスは、ライフサイクルの全般を通しての生涯学習を初めて体系的に語った教育学者でもあり、その中には誕生前の母親に対しての教育、母親教育から高齢期には、自らの死への心の準備、死の受容といった今日的な観点も含まれている。
- 176) 滝内大三著；前掲書104), p319.
- 177) マシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-1858)；イギリスの詩人、批評家。トマス・アーノルドの息子。『教養と無秩序』などでイギリス国民の清教徒的偏狭を攻撃して、ギリシャ精神の必要を説き、文芸批評から文明批評に至った。ナイチンゲールの従兄弟と結婚し、詩人でもあるアーサー・ヒュー・クラフは彼の友人である。
- 178) 三好信治著；前掲書108), p322.
- 179) 青山なお編集；前掲書97), p96.
- 180) 青山なお編集；前掲書97), p129.
- 181) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857)；フランスの哲学者、社会学者、実証主義の始祖。サン・シモンの弟子。彼は、全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て、実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし、実証的宗教においては、崇敬の対象は人間性であり、その目的は人類の幸福と進歩にあるとした。
- 182) 清水幾太郎編；世界の名著49 コント スペンサー, 社会静学と社会動学, p256, 中央公論社, 1995年.
- 183) Mary Poovey Edited; 前掲書83), p31.
- 184) 青山なお編集；前掲書97), pp128-129.
- 185) Florence Nightingale (1860)；前掲書27), p165.
- 186) Florence Nightingale (1860)；前掲書27), p165.
- 187) 青山なを著；前掲書96), p89.